

K250.8

2

2b

中等文法 文語

文部省

K250.8
2
2b

中等文法 文語

文部省

國立中央圖書館
藏書
印

目 録

一 文語とその文法	一
二 自立語で活用の有るもの	二
三 自立語で活用が無いもの	四
四 附属語で活用の有るもの	十
五 附属語で活用が無いもの	十一
六 動詞の活用(一)	十二
七 動詞の活用(二)	十九
八 形容詞の活用	二十七
九 形容動詞の活用	三十二
十 助動詞の接続と活用(一)	三十六
十一 助動詞の接続と活用(二)	四十七
十二 助動詞の接続と活用(三)	五十五
十三 助動詞の接続と活用(四)	六十一
十四 助詞の種類と用法	七十

十五	文節の構造	八十九
十六	文節と文節との関係	九十四
十七	文の構造	百
十八	文の種類	百五

附 表

第一表	口語及び文語動詞活用表	百十
第二表	口語及び文語形容詞活用表	百十二
第三表	口語及び文語形容動詞活用表	百十二
第四表	口語及び文語助動詞活用表	百十三
第五表	口語及び文語助動詞接続表	百十四
第六表	口語及び文語助動詞接続表	百十五

一 文語とその文法

〔一〕 口語に対して、文字で書く時だけに用いる文語というものがある。

- (一) 廣く會議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ
- (二) 当地も三月に入りてより寒氣もゆるみ、しのぎやすく相成りみな喜び居り候 故郷の猪苗代湖畔には未だに尺余の白雪もあるべく、冬ごもりの窮屈しみと御察し申上候
- (三) 島々に燈をともしけり春の海
- (四) 雪降れば山よりくだる小鳥多し障子の外にひねもす聞ゆ

右はいずれも文語で書いたものである。

問題 文語の用いられるいろ／＼の場合を考えてみよう。

- 〔二〕 (一) 佛の慈悲によつて、助ける道でもあらばという下心であつたらう。
- (二) 自分のことばかりにかゝらずって、人のために考えないのは、恥すべきことではなからうか。

(三) 嚴然たる態度で自己の信ずるところを述べた。

右の文の傍線を附けた部分は、文語的な言い方である。このように、口語の文章の中に、文語的な言い方をまぜて用いることがある。但し、文語の文章の中に口語的な言い方を混用することは

決してない。

〔三〕 口語と文語との違いは、主として文法の点にある。口語に口語の文法があるように、文語には文語の文法がある。

〔四〕 私どもが口語の文章を書くのには、普通「現代かなづかい」を用いる。ところが文語の文章には、歴史的仮名遣が用いられる。文語の文法は、この歴史的仮名遣の上に組み立てられる。歴史的仮名遣は、昔からの書き方を基としたもので、「現代かなづかい」が私どもの発音に近い書き方であるのに対して、発音と少し離れたところがある。

〔五〕 文語は、昔の人が文章を書く場合に用いた言葉を承け傳えたものである。したがって、文語の文法を知っておれば、昔の文章を読むのに役に立つ。しかし、文語の文法と昔の文章の文法との間には、多少違ったところもあつて全く同じではなく、また、昔の文章でも、時代や種類の違いによつて多少の相違がある。

〔六〕 文語においても、言葉は常に文として現われる。文は文節から成り、文節は單語から成り立つ。單語は、それだけで文節となることのできる自立語と、常に自立語に附いて、はじめて文節となる附屬語とがある。そうして、自立語及び附屬語にそれ／＼活用の有るものと無いものとがある。

二 自立語で活用の有るもの

午前 春陰、午後 春雨。暖かにして のどかに、且つ 静かなり。

〔一〕 逗子の 梅は 多く 老いぬ。八幡の 林には、子を 負ひたる 老婆、松葉 松かさ 枯れ枝を 拾ひつゝ あり。

村より 野に 出づれば、麦の 緑 著しく 深く なりて、野べの 枯れ草も 緑 まだらに もえ出でぬ。雨 そゝろに しゝきて、神武寺の 山 青く かすみ。

〔二〕 右の文中、傍線を附けた語は、いずれも自立語であつて活用が有り、單獨で述語となることのできるものである。即ち、これらは用言である。文語の用言と口語の用言とは、活用の上でかなりの違いがある。

〔三〕 今、右の傍線を附けた語の言い切りになる時の形を挙げると、次のようになる。

暖かなり のどかなり 静かなり 多し 老ゆ 負ふ 拾ふ あり 出づ 著し 深し
なる まだらなり もえ出づ そゝろなり しぶく 青し かすみ

問題 1 右の文語用言は、口語ではどう言うか。言い切りになる時の形で言え。

問題 2 右の文語用言について、その語が口語では、(イ)動詞であるもの、(ロ)形容詞であるもの、(ハ)形容動詞であるものを区別せよ。

問題 3 (イ)の類の文語用言は、どんな音で終るか。(ロ)の類、(ハ)の類はどうか。

口語で動詞に属する語は、文語でも動詞である。文語の動詞も、口語と同様ウ段の音で終る。

但し、口語動詞「ある」は、文語では「あり」であつて、これだけが例外となる。

口語で形容詞に属する語は、文語でも形容詞である。文語の形容詞は「し」で終る。

口語で形容動詞に属する語は、文語でも形容動詞である。文語の形容動詞は「り」で終る。

このように、文語でも、用言は動詞・形容詞・形容動詞の三種に分かれる。そうして、それらはそれ／＼特有の活用を持っている。

三 自立語で活用の無いもの

その夜、喜三右衛門は、かまの なたはらを 離れざりき。鶏の 声を 開きては、はや心も 心に あらず。かまの 周開を、ぐる／＼と めぐり歩きぬ。

夜は、やうやく 明けはなれたり。胸を をどらせつゝ、やをら かまを 開かんとすれば、今しも 朝日、はなやかに さし出でて、かま場を 照らせり。

一つ また 一つ、血走る 眼に 見つめつゝ、かまより 皿を 取り出しゐたる かれば、やがて「おゝ」と 力 ある 声に 叫びて、立ち上がりぬ。

あゝ、多年の 苦心は、遂に 報いられたり。かれは、一枚の 皿を 両手に さげて、しばし かま場に こをどしりぬ。

喜三右衛門は、やがて 名を 柿右衛門と 改めたり。

【一】 右の文中、傍線を附けた語は、いずれも自立語であつて活用の無いものである。活用の無い自立語は、文語と口語とで用いる單語に違いがあるが、文法上の性質はだいたい同様である。

問題 1 口語では、活用の無い自立語にどんな種類があるか。

【二】 日 輝く。

山 青く かすむ。

問題 2 右の文を口語に改めよ。文語と口語とでどんな点が違うか。

問題 3 口語では、主語にどのような助詞を用いるか。

右の文で、「輝く」「かすむ」はそれ／＼述語である。これに対する主語は「日」「山」である。即ち、文語では、口語の場合のように、「が」などの助詞を伴つて主語となつては限らず、助詞を伴わないで主語となることも少なくない。「日」「山」は、このように主語として用いられるから、体言即ち名詞である。体言は「を」「に」「へ」等の助詞をとることが出来る。

問題 4 この章のはじめの例文中から体言を抜き出せ。

【三】 「その夜」の「その」は、口語では、いつも「その」という形でしか用いられないので、これを一つの單語と認め、連体詞とする。ところが文語では、

そは 柿右衛門の 作りし 皿なり。

そを 賜はりたし。

のような言い方がある。故に「そ」だけを一つの單語と認め、それに「の」「は」「を」などの助詞が附くと考えなければならぬ。同様に、口語連体詞の「この」「わが」なども、文語では「こ」「わ」に「の」「が」が附いたものと見なければならぬ。そうして、「そ」「こ」「わ」などは、「が」「の」などの助詞を伴つて主語として用いられるから、これらも体言である。

【四】 体言にいろいろの種類のあることは、口語の場合と同様である。

問題 5 口語では、体言にどんな種類があるか。

〔五〕 文語で普通に用いる代名詞は次の通りである。

自 称	対 称	他 称			不定称	
		近 称	中 称	遠 称		
わ われ おのれ	な なれ なんち	こ	そ	か	た	人
		これ	それ	かれ	たれ	
		こ	そ	か	いづれ	事物
		これ	それ	かれ	なに	
		こ	そ	か	いづこ	場所
		ここ	そこ	かしこ	いづく	
		こち	そち	あち	いづち	方角
		こなた	そなた	あなた	いづかた	

問題 6 以上のほか、文語にどんな代名詞があるかを考えてみよ。

問題 7 例文中の体言を、普通名詞・固有名詞・数詞・代名詞に分けよ。

〔六〕 主語とならないものの中には、それだけで修飾語として用いられるものがある。そうして、その中に用言を修飾するもの即ち副詞と、体言を修飾するもの即ち連体詞とがある。

問題 8 この章のはじめの例文中から副詞を抜き出せ。そうして、一々の副詞がどの語を修飾

しているかを示せ。

〔七〕 副詞は用言を修飾するばかりでなく、(一)他の副詞を修飾したり、(二)ある種の体言を修飾したりすることがある。

(一) なほ しばし。試みよ。

(三) 日は やゝ 西に 傾けり。 たゞ 一人にて 成し遂げたり。

これは、程度を表わす副詞に限って見られるものである。

〔八〕 また、ある種の副詞は、これを受ける語に一定の言い方を要求する。

なんぢ すべからく 学問に 精進すべし。

まさに 壯途に 就かむとす。

われ あに 勞を 惜しまむや。

いづくんぞ わが 志を 知らむや。

よも 知らじ。

必ずしも 反対する 者に あらず。

用意 をさく 怠り なし。

流の 音は あたかも 百雷の 一時に 落つるがごとし。

千木の ほとりを 飛ぶ はとの さながら すゞめのごとく 見ゆ。

なにとぞ 御來臨 なし下されたく 候。

〔九〕 文語で連体詞と認められるものは、「ある」「あらゆる」「いはゆる」などである。

〔10〕 活用の無い自立語には、主語にも述語にもならず、修飾語にもならないものがある。これには、前の言葉を受けて後に結びつける役目をするもの即ち接続詞と、他の文節とはあまり関係がなく、比較的独立して用いられるもの即ち感動詞とがある。感動詞は、それだけで言い切りになって、一つの文をなすことが少なくない。

問題 9 この章のはじめの例文中から接続詞を抜き出せ。また、感動詞を抜き出せ。

〔11〕

かれの私財は、すでに盡きたり。しかも、この救済事業は、中止すべきにあらず。

よつて、あまねく世人に訴へて、寄附を募らむとせり。

日すでに暮れぬ。されど宿るべき所もなし。

かれは政治家にして、且つ教育家なり。

京都及び奈良は日本の旧都なり。

これらはいずれも接続詞である。文語で普通に用いる接続詞には、なお、次のようなものがある。

さらばされば、かくてしたがつて

あるひは、または、もしくは

但し、もつとも、さはれ、然れども、然るに

並びに、また

問題 10 次の傍線を附けた語は、副詞か接続詞か。副詞の場合には、何を修飾するかを示せ。

(甲)きのふ、渡りし、河の上流を、けふ、また、越ゆ。

(乙)進んで、河を、渡り、また、山を、越ゆ。

(甲)八合目より、九合目までの道は、もつとも、けはし。

(乙)山道は、すこぶる、急なり。もつとも、中腹までは、馬背の便あり。

(甲)かれの言、あるひは、真ならむ。

(乙)かれは、相撲、あるひは、柔道に、熱心なりき。

(甲)期限までには、なほ、三日、あり。

(乙)本日の議会は、五時に、終れり。なほ、明日より、休会に、入る。

〔12〕

あつばれ、名馬。たれの馬ぞ。

いな、われらが、知る、ところに、あらず。

いで、大船を、乗り出して、われは、拾はむ、海の富。

やよ、なんぢは、父の、教訓を、忘れたるか。

すは、洪水ぞ。

これらは、いずれも感動詞である。文語で普通に用いる感動詞には、なお、次のようなものがある。

あゝ、あはれ、あな、あはや

さび、や、いかに、おう

問題 11 次の文から副詞・接続詞・感動詞を抜き出せ。副詞は何を修飾するかを示せ。

(一)一切経は、佛教に、関する、書籍を、集めたる、一大叢書にして、この、教へに、志ある、者の、無二の、宝として、尊ぶ、ところなり。しかも、その、巻数、幾千の、多きに、のぼり、これ、出版は、決して、容易の、業に、あらず。されば、いにしへは、支那より、渡來せる、も

四 附屬語で活用のあるもの。

の わづかに 世に 存するのみにて、學者 その 得がたきに 苦しむたりき。

(二) 鉄眼大いに喜び、まさに出版に着手せむとす。たま／＼大阪に出水あり。死者すこぶる多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者数を知らず。

(三) あなにとほし。このあかつき、城の内にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。やさしかりける人々かな。

四 附屬語で活用のあるもの

樺太は 島なりや、また 大陸の 一部なりや、世界の 人の 久しく 疑問と するところなりしが、その 実地を 探検して、これが 解決を 與へたるは、わが 間宮林藏なり。文化五年 四月、林藏は 幕府の 命によりて、松田傳十郎と 共に 樺太に 渡り、海岸を 探りて ほど 島なる ことを 知りぬ。されど、なほ 心に 満たざる もの あり。同年 七月、單身にて また 樺太に 赴けり。まづ 樺太の 南端なる 白主にて 土人を 雇ひ、小舟に 乗りて 北に 進む。途中の 困難 名狀すべからず。

【一】 右の文中、傍線を附けた語は、附屬語であつて活用のあるもの、即ち助動詞である。

問題 右の例文中の一々の助動詞について、それらがどんな品詞に附いているか、調べてみよう。助動詞は、右の例文で知られるように、用言や他の助動詞に附いている／＼の意味を加える。

また、例文中の「なり」や、

かれは 有数の 藏書家たり。

往事を 思へば 夢のごとし。

の「たり」「ごとし」のように、直接に、または「の」を介して体言に付き、その文節を述語とする働きをなすものもある。

五 附屬語で活用のあるもの

春は 島 山 かすみに 包まれて 眠るがごとく、夏は 山海 みな 緑にして 目覚むるばかり あざやかなり。西岸 及び 島々、見渡す 限り 田園 よく 開けて、まうせんを 敷けるがごとく、白壁の 民家 その 間に 点在す。

海の 静かなる ことは 鏡のごとく、朝日 夕日を 負ひて 島隠れ行く 白帆の 影も のどかなり。月影の さゞ波に 碎け、漁火の 波間に 出没する 夜景も また 一段の 趣 あり。

【二】 右の文中、傍線を附けた語は、附屬語であつて活用のあるもの、即ち助動詞である。

問題 右の例文中の一々の助動詞について、それらがどんな品詞に附いているか、調べてみよう。

【三】 助詞は、右のように、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、またはこれに、ある意味を添える語である。

【三】 以上のように、文語においても、口語と同じだけの品詞が認められる。

問題 2 文語にどんな品詞があるか。以上調べて来たことに基づいて、品詞分類の表を作れ。

六 動詞の活用(一)

【一】 問題 1 口語で「打つ」「着る」はどう活用するか。その活用形は幾つあるか。

口語の「打つ」「着る」が、文語ではどう活用するかという、

(一) 打たず 打たむ 着ず 着む

(二) 打ちたり 着たり

(三) 打つ 着る

(四) 打つ 時 着る 人

(五) 打てども 着れど

(六) 打て 着よ

即ち、文語でも口語と同様、動詞の活用には六つの場合がある。

(一)の「打た」「着」は、口語の「ない」に当たる「ず」、「う」「よう」に当たる「む(ん)」に連なる形である。これを口語の場合と同様、未然形という。

(二)の「打ち」「着」は「たり」に連なるほか、「て」「き」「けり」などに連なる形である。こ

れを連用形という。

(三)の「打つ」「着る」は言い切る場合に用いる形で、これを終止形という。

(四)の「打つ」「着る」は「時」「事」「所」「物」「人」など、各種の体言に連なる形で、これを連体形という。

(五)の「打て」「着れ」は「ども」「ど」に連なる形である。また、「ば」に連なって、すでにさうであるという意味を表わす。文語ではこの形を已然形という。

打てども 響かず。

打てば 響く。

口語の「打てば」「響こう」のような仮定を表わす言い方は、文語では未然形に「ば」を附けて言う。

打たば 響かむ。

(六)の「打て」「着よ」は命令の意味を表わすために用いる形で、これを命令形という。

問題 2 文語動詞と口語動詞とで、その活用形にどんな違いがあるか。

【二】 文語においても、動詞の活用は幾つかの種類がある。

問題 3 口語ではどんな種類があるか。

【三】 今、口語で四段に活用する動詞「読む」について、その文語における活用を調べてみると、次の通りである。

少しも 書を 読まず。

万卷の 書を 読んだり。

史書を 読む。

書を 読む、時は、姿勢を 正しく すべし。

終日 書を 読めども、なほ 飽く ところを 知らず。

正しく 読め。

問題 4 右にならつて、「書く」を活用させてみよ。

問題 5 「読む」「書く」の活用を表に作れ。

基本の形	語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
読む	よ(読)						
書く	か(書)						
おもな用法		連なるに	連たりに	切言るい	「時」に連なるに	連下せるに	命令の意味で言い切る

問題 6 この活用を口語の「読む」「書く」の活用と比べて見よ。

このような活用を、文語でも **四段活用** という。

問題 7 次の語は、いずれも文語において四段に活用する動詞である。活用させてみよ。

動く 防ぐ 示す 立つ 学ぶ 望む 祈る

問題 8 右の語は、口語では何活用に属するか。

問題 9 口語の四段活用動詞「救う」「拾う」などは、文語ではハ行に活用する。活用させてみよ。

○文語四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・タ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。

〔四〕 口語で四段に活用する「死ぬ」は、文語では次のように活用する。

いかでか 死なむ。

その 人 はやく 死にたり。

朝に 生まれ 夕べに 死ぬ。

飢ゑにて 死ぬる 者 数を 知らず。

身は 死ぬれども 業績は 後の 世に のこれり。

世の ために 死ぬ。

問題 10 「死ぬ」の活用を表に作れ。

問題 11 口語の「死ぬ」の活用と比べてみよ。どこが違うか。また、文語の「読む」「書く」の活用と比べてみよ。

活用と比べてみよ。

問題 12 四段活用の動詞、例えば「読む」という語においては、終止形と連体形は共に「読む」であり、已然形と命令形は共に「読め」である。文語の「死ぬ」の諸活用形において、活用語尾の形の同じものがあるか。

問題 13 文語の「死ぬ」は、五十音図のどの行に活用するか。

このような活用を **ナ行変格活用**(ナ変)という。この活用に属する動詞は、右の「死ぬ」を除くと、古く用いられたものとして「往ぬ」があるだけである。

問題 14 口語で四段に活用する「ある」は、文語では次のように活用する。

〔五〕 口語で四段に活用する「ある」は、文語では次のように活用する。

魂 天外に 飛び、心 こゝに あらず。

顔回と いふ 者 ありき。

こゝに 昔の 閑跡 あり。

情 ある 人なりき。

父は あれども、母 なし。

御國に 榮え あれ。

問題 14 「あり」の活用を表に作れ。

問題 15 終止形はどんな音で終っているか。

問題 16 口語動詞「ある」の活用と比べてみよ。どこが違うか。また、文語の「読む」「書く」の活用と比べてみよ。

問題 17 文語動詞「あり」は、五十音図のどの行に活用するか。

このような活用をラ行変格活用(ラ変)という。この活用に属する動詞は、「あり」のほかに「居り」がある。また、古く用いられたものとして「侍り」がある。

問題 18 「居り」「侍り」を活用させてみよ。

問題 19 口語動詞「おる(居)」はどう活用するか。

【六】 口語で四段に活用する「蹴る」は、文語では次のように活用する。

球を ける。

球を けたり。

球を ける。

ける 時は 勢ひ よく けるべし。

強く けれども 遠く 飛ばず。

早く けよ。

問題 20 「ける」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

問題 21 口語の「ける」の活用と比べてみよ。どこが違うか。また、文語の「読む」「書く」の活用と比べてみよ。

問題 22 この活用を口語下一段活用の動詞「受ける」「捨てる」の活用と比べてみよ。

問題 23 文語の「ける」は、五十音図のどの行に活用するか。

このような活用を下一段活用という。

【七】 口語で下一段に活用する「受ける」は、文語では次のように活用する。

未だ 試験を 受けず。

昨日 試験を 受けたり。

地理の 試験を 受く。

試験を 受くる 者は 八時に 集合すべし。

たび／＼ 試験を 受くれども 通らず。

明日 試験を 受けよ。

問題 24 「受く」の活用を表に作れ。

問題 25 口語動詞「受ける」の活用と比べてみよ。どこが違うか。
このような活用を下二段活用という。

問題 26 次の文語動詞は下二段に活用する。一々活用させてみよ。

助く 平ぐ 失す 混す 金つ 連ぬ 調ぶ 認む 恐る

問題 27 右の動詞は、口語ではどんなに活用するか。

問題 28 口語下一段活用の動詞「なでる」「ゆでる」などは、文語では各行下二段に活用する。活用させてみよ。

問題 29 口語でア行下一段に活用するものうち「興える」「教える」などは、文語ではハ行下二段に、「越える」「覚える」などはヤ行下二段に、「植える」「据える」などはワ行下二段に活用する。活用させてみよ。

問題 30 口語下一段活用の動詞「得る」「出る」「寝る」「経る」は、文語では、「得」「出づ」「寝」「寝ぬ」「経」である。これらはいずれも下二段に活用する。活用させてみよ。また、これらはどの行に活用するか。

○ア行下二段活用の動詞は「得」「心得」だけである。

○ワ行下二段活用の動詞は「植う」「飢う」「据う」の三語である。

○ヤ行下二段活用の動詞は「覚ゆ」「消ゆ」「聞ゆ」「肥ゆ」「越ゆ」「榮ゆ」「冷ゆ」「絶ゆ」「見ゆ」「燃ゆ」等である。

○その他の「エ」「ウ」「ウル」「ウレ」「エヨ」と発音するものは、すべてハ行に活用する動詞である。

問題 31 口語で下一段に活用する動詞は、文語ではどんなに活用するか。

問題 32 文語で下一段に活用する動詞には、どんなものがあるか。

○文語下二段活用の動詞は、五十音図の各行とガ・ザ・ダ・バの各行とにある。

七 動詞の活用(二)

「ハ」 口語で上一段に活用する「見る」は、文語では次のように活用する。

未だ 鳥影を 見ず。

前方に 鳥影を 見たり。

はるか 前方を 見る。

詳細に 見る 時は、その 誤りなる ことを 発見すべし。

見れども 見えず。

注意して 見よ。

問題 33 「見る」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

問題 34 口語の「見る」の活用と比べてみよ。

このような活用を、文語でも上一段活用という。

問題 35 次の語は文語でも上一段に活用する。一々活用させてみよ。

着る 似る 煮る 干る 願ひる 試みる

問題 36 口語でア行上一段に活用するものうち「いる(居)」「率いる」は、文語ではワ行上一段に活用する。また、「射る」「鎔る」は文語ではヤ行上一段とする。活用させてみよ。

○ワ行上一段活用の動詞は「居る」「率ある」だけである。

○ヤ行上一段活用の動詞は「射る」「鎔る」だけである。

○文語上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

【九】

口語で上一段に活用する「起きる」は、文語では次のように活用する。

弟は 未だ 起きず。

けさは 五時に 起きたり。

毎朝 六時に 起く。

朝 起くる 時は すみやかに すべし。

五時に 起くけれども 父に 及ばず。

早く 起きよ。

問題 37 「起く」の活用を表に作れ。

問題 38 口語動詞「起きる」の活用と比べてみよ。どこが違うか。また、文語の「見る」の活用と比べてみよ。

このような活用を上二段活用という。

問題 39 次の文語動詞は上二段に活用する。一々活用させてみよ。

伸ぶ 過ぐ 落つ 亡ぶ 恨む 下る

問題 40 口語でヤ行上一段に活用するものうち「閉じる」「ねじる」などは、文語ではダ行上一段に、口語でア行上一段に活用するものうち「用いる」「強いる」などは、ハ行上一段に、「報じる」「悔いる」などはヤ行上二段に活用する。活用させてみよ。

○ヤ行上二段活用の動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語である。

○文語上一段活用の動詞は、カ・ガ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行にある。

○「用ふ」はまた、ワ行上一段にも活用する。

○上一段活用の「試みる」はまた、上二段に活用することもある。

【十】

口語カ行変格活用の動詞「くる(來)」は、文語では次のように活用する。

人も 訪ねては こず。

少年 ひとり きたり。

人 くる。

人の 訪ねて くる こと なし。

春は くれども 花 咲かず。

春よ、とく こよ。

問題 41 「くる」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

問題 42 口語動詞「くる」の活用と比べてみよ。どこが違うか。

問題 43 文語動詞「く」はどの行に活用するか。

このような活用を、文語でも力行変格活用(カ変)という。この活用に属する動詞は「く」だけである。

問題 44 「く」と同じ意味を表わす文語動詞に「來たる」がある。この動詞はどう活用するか。

波に たゞよふ 氷山も、來たらば 來たれ、恐れむや。

【二】口語サ行変格活用の動詞「する」は、文語では次のように活用する。

照りも せず、降りも せず。

けふ 一日 読書を したり。

艱難 なんぢを 玉に す。

する 事 なくて 日は 過ぎぬ。

世の ために すれども、世人 その 眞意を 知らず。

なんぢ 怠らず 仕事を せよ。

問題 45 「す」の活用を表に作れ。

○この動詞は語幹と活用語尾との区別がつかない。

問題 46 口語動詞「する」の活用と比べてみよ。どこが違うか。

問題 47 文語動詞「す」は、どの行に活用するか。

このような活用を、文語でもサ行変格活用(サ変)という。この活用に属する本来の動詞は「す」だけであるが、この「す」は名詞などと合して多くのサ変複合動詞を作る。

罪す 與す 嘉す 輕んず 甘んず 疎んず 先んず 全うす かなじけなうす 製す

訳す 命す 論す 生ず 活動す 学問す

問題 48 右のサ変動詞を活用させてみよ。

問題 49 「死ぬ」と同じ意味を表わす文語動詞に「死す」がある。これもサ変に活用する。活用させてみよ。

志 成らずば 死すとも 歸らじ。

問題 50 「す」と同じ意味を表わす文語動詞に「なす」がある。「なす」はどう活用するか。

【三】文語動詞の活用の種類は、右に挙げた通りである。

問題 51 文語動詞の活用にはどんな種類があるか。口語動詞ではどうか。

問題 52 文語動詞と口語動詞との活用の種類を対照してみると、その間にどんな関係が見られるか。

問題 53 文語動詞のおの／＼の種類から代表的な語を挙げて、これに打消の「ず」を附けてみよ。五十音図のどの段の音から「ず」に続くか。

問題 54 下一段活用及びカ変に属する動詞は、たゞ一語ずつである。サ変に属するものも、複合動詞の場合を除けばたゞ一語である。ナ変・ラ変に属するものも極めて少ない。上一段活用に属する動詞もさほど多くない。これらを一々挙げてみよ。

問題 55 以上を除けば、動詞は、四段活用か、上二段活用か、下二段活用に属する。四段か、上二段か、下二段かを簡単に見分ける方法を考えてみよ。

【三】 文語動詞にも音便の形がある。

問題 56 (イ)口語動詞には幾種類の音便の形があるか。

(ロ)音便の形のある動詞は何活用の動詞か。

(ハ)どういふ場合に音便の形が見られるのか。

文語では、主として、四段・ナ変・ラ変の動詞が助詞「て」に連なる時に現われる。しかし、口語と違って、「て」に連なる場合にいつでも音便の形が用いられるというのではない。そうして、口語の場合と比べると、その種類が一つ多くなっている。

一 語尾がイとなるもの(イ音便)——カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(ガ行の時は、「て」は「ど」となる。)

二 語尾がウとなるもの(ウ音便)——ハ行四段のヒから。

三 語尾がンとなるもの(撥音便)——バ行四段のビ、マ行四段のミ、ナ変のニから。(この場合、「て」は「で」となる。)

四 語尾が促音となるもの(促音便)——タ行四段のチ、ハ行四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ変のリから。

問題 57 右の四種類のものの、の実例を考えてみよ。

【四】 口語では、例えば「泳ぐ」に対して「泳ぐことができる」の意の「泳げる」という動詞があるように、口語四段活用の動詞には、これに対する可能動詞がある。しかし文語には、このような言ひ方はなう。

【五】

(一) 戸、おのづから あく。

戸を あく。

(二) 疑ひ おのづから 解く。

疑ひを 解く。

(三) 廣場に 集まる。

人を 集む。

(四) 子犬 生まる。

犬 子を 産む。

(五) 名 著はる。

名を 著はす。

(六) 水 流る。

水を 流す。

(七) 花 はら／＼と 散る。

花を 散らす。

人 起く。

人を 起す。

湯 沸く。

湯を 沸かす。

問題 58 右の動詞の活用を調べよ。

このように、文語においても、語の中心をなす部分に共通点のある動詞の間に、活用が違うに従つて、その動作や作用を、(一)それ自身だけの働きとして表わすものと、(二)他に対する働きかけ、または他を作り出す働きとして表わすものと、この二種類がある。

また、その表わす意味は違うが、活用の同じものもある。

風 吹く。 火を 吹く。

河水 増す。 池の 水を 増す。

雨 注ぐ。 水を 注ぐ。

【六】 文語動詞の連用形が中止法として用いられることは、口語と同様である。

風 叫び、海 怒る。

〔二七〕

文語動詞の連体形及び已然形は、次のように、文の終りに用いられることがある。

(一) 花の 香ど する。

これも 功德の 一つになむ ある。

月や 出づる。

たれをか 訪ぬる。

(二) 春をこそ 待て。

月こそ 出づれ。

即ち、ある一定の助詞を受けて動詞で文を終止する時に、あるいは連体形で、あるいは已然形で、言い切りにするのである。

問題 59 どういう場合に連体形が用いられ、どういう場合に已然形が用いられるか。右の例文によつて考えてみよう。

問題 60

次の漢字を、口語と文語との動詞に用いて、その活用の仕方を比べてみよう。

老 植 殖 換 下 怖 生 絶 並 触 恥 悔 堪

問題 61

次の文の傍線を附けた動詞の活用の種類を考えよ。

(一) 紫式部は 幼き ころより 物覚え よく、兄の 書を 読むを 聞きぬて、直ちに これを そらんじ、少しも 忘るる こと なかりしかば、父の 爲時は 常に その 頭を なでて、

「なんぢの 男と 生まれざりしが 口惜し。」と 言ひたりとぞ。夫に 別れて 後、宮中に 召されて、上東門院に 漢文 漢詩を 教へまゐらせたり。

(二) 寺門を出で、こけむしたる坂道をくだりて、那智の滝の正面に立つ。側けは、百数十メートルの中空より落ち来る滝、はじめは水筋通りて見ゆれども、岩に当たり石に砕け、下は漢々として雲のごとく、綿のごとく、美観、言語に盡くしがたし。

問題 62

次の文に誤りがあつたら正せ。

- (一) 若き時學ばずば、老ひて悔うる時あるべし。
- (二) 國家の榮へんことを願いて、絶へず産業を奨励せり。
- (三) みづから深くその誤りを恥じて、再び人に教ゆるを欲せず。
- (四) 鹿追う獵師は山を見ず、飢えたるものは食を選ばず。
- (五) 堅く門を閉じて、決して出することなかれ。
- (六) 勇むで家を出でたり。
- (七) 重荷を負ふて坂を登る。
- (八) 試みに数匹の馬を追ひ落したるに、轉びて倒れるもあり、足を折りて死ぬもあり。

八 形容詞の活用

〔一〕 問題 1 口語の形容詞はどんなに活用するか。また、どんな活用形があるか。
今、口語形容詞「よい」が、文語ではどう活用するかを調べてみると、次の通りである。

- (一) 月 よくは 共に ながめむ。
- (二) こよひは 月 よからず。
- (三) 雲 はれ行きて 月も よく なりぬ。
- (四) 月 いと よかりき。
- (五) 月 よし、夜 よし、水も よし。
- (六) 秋は 月 よき 時なり。
- (七) こよひの 月は よかるべし。
- (八) 月は よけれども 風 やゝ 寒し。
- (九) 夜も よかれ、月も よかれ。

これを文語の動詞の場合に準じてまとめると、次のように六つの活用形が立てられる。

- (一)は、「ば」に連なつて仮定の意味を表わす形である。また、(二)は「ひ(ん)」「ず」に連なる。故にこの(一)と(二)とを合わせて未然形という。
- (三)は、「なる」等の用言に連なる形、(四)は、「き」「けり」などに連なる形である。故にこの(三)と(四)とを合わせて連用形という。
- (五)は、言い切りに用いる形である。故に終止形という。
- (六)は、「時」「事」「所」「物」「人」など各種の体言に連なる形であるから、連体形という。
- (七)は、「べし」などに連なる形であるが、これも連体形とする。
- (八)は、「ど」「ども」に連なる形である。また、「ば」に連なつて、すでにそうであるという意味を表わす。故に已然形という。

味を表わす。故に已然形という。

(九)は、命令の意味を表わす形である。故に命令形という。

問題 2 右にならつて、「高い」「寒い」の文語における活用を調べてみよ。

「三」 右の「よし」の活用を表にまとめると、次のようになる。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
よし	よ	く	かり	し	かる	けれ	かれ
おもな用法		バ・ズに連なる	ナル・キに連なる	言切る	い「時・べし」に連なる	下モに連なる	命令の意味で言い切る

問題 3 口語形容詞「よい」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題 4 次の語は「よし」と同じように活用する。活用させてみよ。

赤し 青し 白し 強し 弱し 廣し 狭し 清し 暗し 幼し 無し

「三」 次に、口語形容詞「正しい」の文語における活用を調べてみると、次の通りである。

正しくば 何か 恐れむ。
いづれか 正しからむ。
その 心も 次第に 正しく なりぬ。
きみは 正しかりき。
心 極めて 正し。

心 正しき 人なりき。

常に 正しかるべし。

言 正しけれども 世に 用ひられず。

きみよ、正しかれ。

問題 5 「正し」の活用を表に作れ。

基本の形	語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
正し	ただ(正)						
おもな用法		連・ズ なるに	ナレ・ギ に連なる	言 切る	い 「時・バシ」 に連なる	連・セ なるに	命令の意味 で言い切る

問題 6 口語形容詞「正しい」の活用と比べてみよう。どこが違うか。

問題 7 「よし」の活用と比べて違う点はないか。

問題 8 次の語は「正し」と同じように活用する。活用させてみよう。
勇まし うれし 苦し 樂し 激し 久し 惜し 珍し 美し 詳し 涼し

問題 9 口語形容動詞「同じだ」に当たるものは、文語では「同じ」であって、形容詞に属する。「同じ」を活用させてみよう。「正し」と比べると、どこが違うか。

「四」「よし」のような活用をク活用、「正し」のような活用をシク活用という。文語の形容詞の活用には、この二種類がある。

「五」形容詞にも音便の形がある。主として、連用形のうちの「く」「しく」の形が他の用言に連なる時と、連体形のうちの「き」「しき」の形が助詞「かな」に連なる時に現われる。前者はッ音便に、後者はイ音便になる。

雨 ひとしきり 強う 降る。

何 着ても 美しう なる 月見かな。

よしかな。

悲しいかな。

○口語では、「赤い」「新しい」が「ございます」に連なる場合には、「あこうございます」「新しいうござい
ます」となるが、文語の音便の形では「あかう」「新しい」である。(発音は口語の場合と同じ。)

「六」形容詞の連用形のうちの、「く」「しく」の形は用言を修飾するのに用いられる。

天 よく 晴れたり。

正しく 読む。

また、「く」「しく」の形は中止法としても用いられる。

風 強く、波 高し。

夏は 涼しく、冬は 暖かなり。

「七」連体形のうちの「き」「しき」の形、及び已然形は、動詞の場合と同様、ある一定の助詞を受けて文を終止する時に用いられる。

(一) 悲しみぞ 深き。

心なむ 正しき。

風や 強き。

- などか。苦しき。
(二) 月こそ。よけれ。
祝ふ けふこそ。樂しけれ。

九 形容動詞の活用

- 〔一〕 今、口語形容動詞「静かだ」が、文語ではどう活用するかを調べてみると、次の通りである。
- (一) 風 静かならず。 海上も 静かならむ。
- (二) 海 いと 静かなりき。
- (三) 波 いと 静かに なる。
- (四) 天 よく 晴れて、海 いと 静かなり。
- (五) 波 静かなる 時 あり。
- (六) 夜は 静かなれども、なほ 眠る こと 難し。
- (七) こよひ 一夜は 静かなれ。
- 問題 1 右にならって、「正確なり」の活用の仕方を調べてみよう。
- このように、文語形容動詞には、七つの違った形が見られるが、動詞の場合に準じてまとめると、右のうちの(一)と(三)とが一つの活用形となり、結局、動詞及び形容詞の場合と同様に、六つの活用形が立てられる。

〔二〕 「静かなり」「正確なり」の活用を表にまとめると、次の通りである。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
静かなり	静か	「なら	「なり	「なり	「なる	「なれ	「なれ
正確なり	正確	「なら	「なり	「なり	「なる	「なれ	「なれ
おもな用法		連なるに	にキ・ナレに連なる	切言るい	連「時」なるに	連「モ」なるに	命令の意味で言切る

問題 2 口語形容動詞「静かだ」の活用と比べてみよう。

問題 3 次の語は、「静かなり」「正確なり」と同じように活用する。活用させてみよう。

あざやかなり 穏やかなり 盛んなり 巧みなり 懇切なり ていねいなり おごそかなり
すみやかなり 嚴重なり のどかなり はるかなり 異なり

〔三〕 文語に「堂々たり」という語がある。その活用は次の通りである。

態度は 常に 堂々たりき。
堂々と 所信を 述ぶ。
威風 堂々たり。
堂々たる 威容を 示す。

態度 堂々たれば、ほめざる 者なし。
常に 堂々たれ。

問題 4 「堂々たり」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
堂々たり							
おもな用法	連なるに	キ・ナルに連なる	言るに	「時」なるに	下モに連なる	命令の意味で言い切る	

問題 5 「静かなり」の活用と比べてみよ。どんな共通点があるか。

問題 6 次の語は「堂々たり」と同じように活用する。活用させてみよ。

泰然たり 整然たり 平然たり 朗々たり 洋々たり 炎々たり 白若たり 穢たり 惨たり

○この活用の連体形「たる」は、口語の文章の中にもしばしば用いられる。

決然たる 態度で 会議に 臨んだ。

【四】「堂々たり」も、その活用の仕方において、「静かなり」と共通する点がある。故にこれも形容動詞と見ることができる。「静かなり」のような活用をナリ活用、「堂々たり」のような活用をタリ活用という。文語の形容動詞の活用にはこの二種類がある。

【五】形容動詞の連用形のうち、「に」「と」の形は用言を修飾するのに用いられる。
穏やかに ふるまふ。 盛んに 活動す。

整然と そろふ。

朗々と 歌ふ。

【六】ナリ活用の連用形「に」は、それだけで中止法として用いられるが、タリ活用の連用形「と」は、それだけでは中止法として用いられず、必ず「して」を伴う。

氣候 溫和に、風光 明らかなり。

態度 堂々として、音声 朗々たり。

【七】形容動詞の連体形・已然形が、ある一定の助詞を受けて文を終止する時に用いられることは、動詞・形容詞の場合と同様である。

何ぞ かく 平然たる。

こよひ 月こそ 明らかなれ。

問題 7 次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用の仕方を示せ。

(一) もみは 柔らかにして 工作に 便なれば、諸種の 箱を 作るに 用ひられ、つがは 堅くして 久しきに 耐ふるが 故に、家屋の 柱 土台と なすに よろし。

(二) けやき・くり・かしはいづれもはなはだ堅く、木目こまやかなり。中にもけやきは、木目美しく、みがけは美麗なる光沢を生じ、また狂ひ少なきが故に、裝飾材として珍重せられ、くりは耐久・耐濕の性、ことに著しきをもつて、家屋の土台、鉄道の枕木等の用に供せられ、かしは最も堅くして弾力に富むが故に、船・車・運動器具のごとき強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

問題 8 「自立語で活用の有るもの」の章のはじめの例文について、その中の用言の活用の仕方を示せ。

十 助動詞の接続と活用(一)

〔一〕

(一) 本を 読む。

(二) 本を 読まず。

(三) 本を 読みたり。

(四) 本を 読ましむ。

(五) 本を 読ましめたり。

(六) 本を 読ましめず。

(七) 本を 読ましめざりき。

問題 1 (イ) 右の例文を、意味の上からそれ／＼比較してみよ。

(ロ) その意味の違いは、どの部分で表わされているか。

(ハ) それ／＼の例文には、助動詞が幾つ用いてあるか。

(ニ) 助動詞に活用のあることを、右の例文について示せ。

〔三〕 文語の助動詞も、用言に附いていろ／＼の意味を加えてその敘述を助け、あるいは体言などに附いてこれに敘述する意味を加える。そうして、用言に附く場合には、どんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまっている。したがって、文語の助動詞も、口語の場合と同様、どんな語に附くか、どんな活用形に附くかによって、幾つかの種類に分けられる。

問題 2 口語の助動詞は、接続の仕方から見ても幾種類に分けられるか。

〔三〕 文語の助動詞は、口語に比べるとその数が多く、また、口語のとは違った語を用いることが多い。また、活用においても口語と違ったところが多い。

〔四〕 す さす

〔手紙を 書く。〕

〔手紙を 書かず。〕

〔試験を 受く。〕

〔試験を 受けさす。〕

右の言い方を比べてみよ。この「す」「さす」は口語の「せる」「させる」に当たるものである。

問題 3 口語の助動詞「せる」「させる」はどんな意味を表わす語か。

〔す〕「さす」は次のように活用する。

(一) われに 知らせず。

(二) なんぢに 知らせたり。

(三) かれに 知らず。

(四) 遂に 知らずる 時 なし。

(五) その 由 知らすれども 聞かず

して やみぬ。

(六) われに 知らせよ。

問題 4 右の例文を基にして、「す」「さす」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

十 助動詞の接続と活用(一)

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す						
さす						
おもな用法	連ズ なるに	連タリ なるに	切言 るい	連「時」 なるに	連ドセ なるに	命令の意味 で言い切る

問題 5 「す」「さす」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

問題 6 右の例文において、「す」が附いている動詞は何活用か。「さす」が附いている動詞は何活用か。

「す」「さす」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。次の語の(一)の類の動詞には「す」が付き、(二)の類の動詞には「さす」が附く。

- (一) 打つ 喜ぶ 取る 養ふ 移す 死ぬ あり
(二) 強ふ 見る 預く 来 出づ 射る 受く 作業す

問題 7 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何活用か。

○サ変動詞においては、その未然形に「さす」が附いて、例えば「旅行せ。さす」「理會せ。さす」となるのが普通であるが、「旅行さす」「理會さす」のような言い方をすることもある。

【五】しむ

読み書きを 習はしむ。

弟を 行かしめむと 欲す。

團結を 強固ならしめたり。

人を 感動せしむる 話に 富む。

人を 樂しましむれど、己れは 樂しみを 求めず。

われに 言はむと 欲する ところを 言はしめよ。

右のように、「しむ」は「す」「さす」と同様の意味を表わす。

問題 8 右の例文を基にして「しむ」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

問題 9 「しむ」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

「しむ」はすべての動詞に附くほか、形容詞・形容動詞にも附く。

問題 10 次の語に「しむ」を附けてみよう。

動く 見る あり 死ぬ 来 作業す 樂し 高し 靜かなり 堂々たり

○口語の文章の中に、この「しむ」を用いることがある。その場合には、「しむ」は下二段に活用する。

二隻の ボートに 分乗せしめた。

心胆を 寒からしめる。

【六】る らる

この助動詞は、「口語助動詞「れる」「られる」に当たるものである。

(イ) 読書に 心を 奪はる。

幾たびか ことわりたれども、許されず。

十 助動詞の接続と活用(一)

十 助動詞の接続と活用(一)

四十

春は 堂宇 かすみに 包まれて、さながら 夢のごとし。

柿右衛門風と 呼ばれる 陶器を 作り出だせり。

人に そしらるれど 顧みず。

頼みがひ ある 者と 思はれよ。

(ロ) 多年の 苦心 報いらる。

一藝 ある 者は、必ず 挙げ用ひられむ。

道は 夜來の 雨に 清められたり。

当時の お庭などは、今日も そのまゝ 保存せらるるなりとぞ。

人に ほめらるれど、いさゝかも 誇らず。

人に 信賴せられよ。

問題 11 右の例文を基にして「る」「らる」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

問題 12 「る」「らる」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

問題 13 右の例文において、「る」の附いている動詞は何活用か。「らる」の附いている動詞は何活用か。

「る」「らる」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。次の(一)の類の動詞には「る」が付き、(二)の類の動詞には「らる」が附く。

(一) 焼く 移す 打つ 養ふ 怪しむ 送る 死ぬ あり

(二) 見る 用ふ 閉づ 預く 慰む ける 來 罪す

問題 14 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何活用か。

○サ変動詞においては、その未然形に「らる」が附いて、例えば「鍛錬せらる」「うはさせらる」となるのが普通であるが、「鍛錬さる」「うはささる」のような言い方をすることもある。

【サ】 (一) 一日に 十里は 行かるべし。

この 閑所、たやすくは 越えられず。

(二) 母の 便りのみ 待たる。

ありし 日の 姿 思ひ出でたる。

(三) 父上 外地より 帰らる。

先生も 参加せらる。

右の(一)(二)(三)の「る」「らる」は、それ／＼違った意味を表わす。また、前に挙げた「る」「らる」も、これらとは意味が違っている。

問題 15 一体どう違うか。口語の「れる」「られる」のことをも参照して考えよ。

これらの「る」「らる」は、前に挙げた「る」「らる」と、活用も続き方も同じである。但し、(一)及び(二)の場合の「る」「らる」には命令形が無い。

問題 16 次の「らる」を区別せよ。

(一) 世界に 名を 知らる。

(二) 廣く 用ひらる。

【ハ】 尊敬の意味を表わすには、助動詞「る」「らる」を用いるほかに、尊敬の意味を含んだ特別の動詞を用いることがある。そのおもなものは、次の通りである。

召す 思し召す 聞し召す 知ろしめす 給ふ のたまふ います まします おはす

おはします 仰す

このうち「召す」「思し召す」「聞し召す」「知ろしめす」「仰す」などには、更に尊敬の助動詞「る」「らる」の附くことがある。

【九】「す」「さす」「しむ」が尊敬の意味を表わすことがある。この場合はたいてい「らる」「給ふ」のような尊敬の意味を持つ語と共に用いられる。

よゝと 泣かせ給ふ。

いたく 心に かけさせ給ふな。

臨場 あらせらる。

をしへを 垂れさせらる。

この年 御位に 即かしめ給ふ。

【一〇】す

色合ひも さだかならず。

急がずば ぬれざらましを、旅人の あとより 晴るる 野路の 村雨。

塵 一つ 残らず なりぬ。

しばし 感じて やまざりき。

思ひも よらぬ 出来事に 驚きたり。

己れの 欲せざる ところ、人に 施す こと なかれ。

園内は さして 廣からぬど、いと 趣 あり。

齡 三十に 満たざれど、その 学識 はなはだ 深し。

いやしきを そしらざれ。

右のように、「ず」は打消を表わす。口語助動詞の「ない」に当たる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	ざれ
おもな用法	バ・ムに連なる	ナル・ヤに連なる	言切る	時なるに連なる	下モに連なる	命令の意味で言い切る

問題 17 これに似た活用が用言にあるか。

問題 18 「ず」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

【ず】は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 19 次の語に「ず」を附けてみよ。

(一) 聞く 立つ 見る 起く ける 助く 死ぬ あり 来 練習す

(二) よし 正し

(三) 静かなり 堂々たり

【一一】む(ん)

やがて 花 咲かむ。

敢然として われ 往かむ。

美しさ たとへむ 方 なし。

事の 由は かれこそ 知らめ。

右のように、「む」は推量する意味、または話し手の意志を表わす。口語助動詞の「う」「よう」に当たる。

○この「む」は「ん」と発音する。また、発音に従って「ん」と書くことも少なくない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む(ん)	○	○	む(ん)	む(ん)	め	○
おもな用法			切言 るい	連「時」 なるに	連下 なるに	

問題 20 これに似た活用が用言にないか。

問題 21 「む(ん)」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「む(ん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 22 問題19の例語に「む(ん)」を附けてみよ。

○「む(ん)」とほとんど同じ意味を表わすものに「むず(んず)」がある。現代の文語ではほとんど用いないが、昔の文章にはしばしば現われる。終止形「むず(んず)」、連体形「むする(んする)」、已然形「むすれ(んすれ)」の三形だけがある。

なんぢが やうなる 者は、いつも 重忠にこそ 助けられんすれ。

【三】じ

喜びの 來たらむ 日も 遠からじ。

かれは 誤りを 重ねじと 誓ひぬ。

右のように、「じ」は「む(ん)」に対する打消であって、推量や意志を表わす。口語の「ないだろう」または「まい」の意味に用いる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○
おもな用法			切言 るい	連「時」 なるに	連「結」 (びとして)	

○「じ」の連体形及び已然形は、古い時代に用いられたことがある。

問題 23 「じ」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「じ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 24 問題19の例語に「じ」を附けてみよ。

【三】まほし

ひとり 行かまほし。

さほど 行かまほしくば、件なひて 行かむ。

さまで 見まほしからず。

まことに あらまほしく 思はる。

いと 行かまほしかりき。

十 助動詞の接続と活用(一)

少しの ことにも 先達は あらまほしき ものなり。
かくこそ あらまほしけれ。

右のように、「まほし」は希望する意味を表わす。この助動詞は、昔の文章には用いられたが、現代の文語では、普通には用いない。

基本の形		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まほし		まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○
おもな用法	連・バ・ズに	にナル・キに連なる	切言る	「時」に連なる	連・ドなる		

問題 25 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

問題 26 「まほし」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「まほし」は動詞に附く。

問題 27 問題19の例語に「まほし」を附けてみよ。

【四】 まし

早く 知らましかば、かゝる 不覚は なからまし。
とや せまし、かくや せまし。

この「まし」は、実際そうでない事を仮にそうと想像して言う場合に用いる。また、「む(ん)」と同様に、口語助動詞「う」「よう」の意味に用いることもある。「まし」は昔の文章には用いられ

たが、現代の文語では、普通には用いない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まし	(ませ)	○	まし	まし	ましか	○
おもな用法	(通なるに)		切言る	「時」に連なる	連・バなる	

○上代には「ませ」という形があり、「ませは」と用いられた。

問題 28 これに似た活用が用言にあるか。

問題 29 「まし」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「まし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 30 問題19の例語に「まし」を附けてみよ。

十一 助動詞の接続と活用(二)

【五】 き

ひとりとして 感泣せざるは なかりき。
遠く 歐洲に 起りし 事件も、数時間にして 報道せらる。
大いに 治績を 挙げしかども、長く その 職に をる こと 能はざりき。
右のように、「き」は過去を表わすのに用いる。口語ではこの場合「た」を用いる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
おもな用法			切言 るい	「時」 なるに	「時」 なるに	

問題 31 これに似た活用が用言にあるか。

問題 32 「き」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「き」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 33 問題19の例語に「き」を附けてみよ。

「き」の終止形はカ変の動詞には全く附かない。その連体形・已然形は、カ変の連用形に附くほか、未然形にも附く。

来^きし
しか

来^きし
しか

また、「き」の終止形は、サ変の動詞の連用形に附くが、連体形・已然形はサ変の未然形に附く。

し^しき
せし
しか

糧^{りやう}盡^{つき}きて 草の根を食^くひ物とし^しき。

専心 耕作に 従事^しせしかば、豊かなる みのりを 得たり。

【六】 けり

それより 後、義家は 匡房^{きやうぼう}を 師として 学びけり。

一座の 人々 これを 聞きて、一度に どつとぞ 笑ひける。

しばし 待てと 言ひけれども、耳を 傾くる 者 なかりき。

右のように、「けり」は過去を表わすのに用いる。口語では「た」がこれに当なる。この「けり」はまた、詠嘆の意味にも用いる。

まことの 契りは 親子の 間にぞ ありける。子をば 人の 持つべかりける ものかな。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○
おもな用法	(ス) 通なるに		切言 るい	「時」 なるに	「時」 なるに	

○「けら」は上代に用いられたが、現在では用いない。

問題 34 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

問題 35 「けり」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「けり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 36 問題19の例語に「けり」を附けてみよ。

問題 37 次の「―けれ」を区別せよ。

- (一) 波こそ 高けれ。
- (二) 夢にこそ 見けれ。

【二七】ぬ

遂に 目的を 達しぬ。

この 事 江戸に 開えなば 必ず 悪しかりなむ。

朱雀門まで 「夜が ほどに 塵灰と なりにき。

色は にほへど 散りぬるを、わが 世 たれぞ 常ならむ。

平家は 落ちぬれど、源氏は 未だ 入りかはらず。

右のように、「ぬ」は完了、即ち動作または事件が完結する意味を表わす。口語の「た」に当たる場合が多いが、また、「てしまふ」「てしまった」「ようになる」「ようになった」に当たる場合もある。

基本の形		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ぬ)	
おもな用法	連ムなるに	連ヤなるに	切言るに	連「時」なるに	連下モなるに	(命令の意味で言い切る)	

○命令形として古く「ぬ」という形があった。

はや 船出 して、この 浦を 去りぬ。

問題 38 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 39 「ぬ」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「ぬ」は動詞・形容詞に附く。

問題 40 問題19の例語に「ぬ」を付けてみよ。

○古くは、「ぬ」はナ変の動詞には附かなかったが、今は附けることもある。

問題 41 次の「ぬ」を区別せよ。

(一) 日は 没しぬ。

(二) 見ぬ いにしへは 知らず。

(三) 才と 徳とを 兼ぬ。

【二八】う

とかくして けふも 暮らしつ。

たゞいま 行きてむ。

遂に 都を 去りてけり。

ほととぎす 鳴きつる 方を ながむれば、たゞ 有明の 月ぞ 残れる。

しばしとてこそ。立ちとまりつれ。

われに 得させてよ。

右のように、「つ」は「ぬ」と同様、完了を表わす。

問題 42 「つ」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

○命令形は、現代の文語ではあまり用いない。

十一 助動詞の接続と活用(二)

問題 43 「つ」はどんな活用形に附くか。右の例文によって調べてみよう。

「つ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 44 問題19の例語に「つ」を附けてみよう。

問題 45 次の「―つ」を区別せよ。

(一) 所持の品を 捨つ。

(二) 見るべきものは 見つ。

○「行きてけり」「行きてき」の「て」は助動詞「つ」の連用形であるが、「行きて聞ふ」の「て」は助動詞である。

【一九】 たり

戸ごとに 門松を 立てたり。

美名を 今に 傳へたり。

人は 形 ありさまの すぐれたらむこそ あらまほしかるべけれ。

一の木戸口の あたりまで 寄せたりけり。

こけ むしたる 岩石 壁のごとく 突き立ちたり。

大いなる 災害を 受けたれども 少しも 屈せず。

その 修業者をば しばらく さて 置きたれ。

右のように、「たり」は過去・完了、または「てある」「ている」の意味に用いる。即ち、口語の「た」に当たる。

問題 46 「たり」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

○命令形は、現代の文語では用いない。

問題 47 「たり」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

「たり」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。

問題 48 問題19の例語の(一)に「たり」を附けてみよう。

【二〇】 たし

一日も 早く 故郷に 帰りたし。

帰りたくば すみやかに 出発せよ。

父母に 会ひたからむ。

御目に かゝりたく 存じ候。

山に 登りたかりき。

家に ありたき 木は 松 櫻。

さだめて 行きたかるべし。

舞をも 見ただれども、それは 次の ことと せむ。

右のように、「たし」は自身の希望する意味を表わす。口語の「たい」に当たる。

問題 49 「たし」の活用を表に作れ。用言のどの活用に似ているか。

問題 50 「たし」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

「たし」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。

問題 51 問題19の例語の(二)に「たし」を附けてみよう。

【三】 けむ(けん)

昔の 友は いづち 行きけむ。

こゝに 住みけむ 人の 心 ゆかし。

人々の 心の うち、さこそは うれしうも また あはれにも ありけめ。

右のように、「けむ(けん)」は、過去の事を推測する意味を表わす。口語の「ただらう」「たであらう」の意味に用いる。この語は現代の文語では普通には用いない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けむ (けん)	○	○	けむ (けん)	けむ (けん)	けめ	○
おもな用法			切言 るい	連「時」 なるに	連下 なるに	

問題 52 これに似た活用が用言にないか。

問題 53 「けむ(けん)」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

「けむ(けん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 54 問題19の例語に「けむ(けん)」を附けてみよう。

問題 55 次の「けむ」を区別せよ。

- (一) 何事か ありけむ。
- (二) なんちに 授けむ。

十二 助動詞の接続と活用(三)

【三】 べし

(一) 会議に 参加する 人員は 百人を 超ゆべし。

(二) 明日 必ず 参上 致すべし。

(三) 一念は 岩をも 通すべし。

(四) 社会の 一人として 盡くすべき 道なり。

(五) 明朝 八時に 集合すべし。

右のように、「べし」は、口語の「う」「よう」のように推量や意志を表わすほかに、「こゝがでる(可能)」、「なければならぬ(当然)」、「なさい(命令)」などの意味を表わす。

「べし」は次のように活用する。

もし 行くべくば 直ちに 行かむ。

心は 常に 勞すべし、苦しむべからず。

いつまでも かくのごとき ものに 満足すべくも あらず。

つとに 正すべかりし ものなり。

数十年の 間に 驚くべき 発達を 遂げたり。

未だ 幼かるべけれど、その 巧みさ 言はむ 方 なし。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
おもな用法	連バ・ズに なるに	ナル・キ に連なる	切言 るい	「時」 連なるに	連ド・セ なるに	

問題 56 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

「べし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ変を除く)と、ラ変・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 57 次の動詞に「べし」を附けてみよ。どんな活用形に附くか。

救ふ 知る 見る 伸ぶ ける 受く 死ぬ 来 運動す

問題 58 ラ変・形容詞・形容動詞に「べし」を附けてみよ。どんな活用形に附くか。

あり 高し 美し 沈着なり 決然たり

○「べし」の連体形「べき」は、口語の文章においても用いられることがある。

これこそ、われらの 行くべき 道では なからうか。

【三】 まじ

(一) 世に かほどの 愚者は あるまじ。

(二) われは 再び かれに 会ふまじと 決心せり。

(三) 言ふまじき ことを 言ひ、行ふまじき ことを 行ふ。

(四) ゆめ 忘るまじきぞ。

右のように、「まじ」は推量・意志を表わすほかに、「してはならない(当然)」、「するな(禁止)」などの意味を表わす。だいたい「べし」の打消と見ることが出来る。口語の「まい」に当たる。

「まじ」は次のように活用する。

参るまじくば その ゆゑを 申せ。

さる 事 あるまじく 思はる。

人には 言ふまじかりけり。

学問は いかなる 者にも 劣るまじ。

いかにも かなふまじき 由 答へたり。

冬枯れの 景色こそ 秋には をさ／＼ 劣るまじけれ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
おもな用法	連バ なるに	ナル・キ に連なる	切言 るい	「時」 連なるに	連ド・セ なるに	

問題 59 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

問題 60 「まじ」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「まじ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ変を除く)と、ラ変・形容詞・形容動

詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 61 問題57の例語に「まし」を附けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 62 問題58の例語に「まし」を附けてみよ。ラ変・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

【三】 らむ(らん)

雲の いづこに 月 宿るらむ。

山門 高き 松風に 昔の 音や。こもるらむ。

みづからは いみじと 思ふらめど いと 口惜し。

右のように、「らむ(らん)」は現在の事実について想像する語で、口語の「だろう」または「であろう」の意味に用いる。この語は現代の文語では普通には用いない。

基本の形	基本の形				おもな用法
	未然形	連用形	終止形	連体形	
らむ (らん)	○	○	らむ (らん)	らむ (らん)	らめ ○
切言	るい	連「時」 なるに	連「時」 なるに	連「時」 なるに	

問題 63 これに似た活用が用言にないか。

問題 64 「らむ(らん)」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

「らむ(らん)」は、動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ変を除く)と、ラ変・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 65 問題57の例語に「らむ」を附けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 66 問題58の例語に「らむ」を附けてみよ。ラ変・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

問題 67 次の「らむ」を区別せよ。

(一) 途中には 旅店 あらむ。

(二) など しか 言ふらむ。

【三】 めり

はや 夜も 明くめり。

この 人をなむ。聖人とは いふめる。

何事をか 言ふめれど、声 低くして 聞えず。

右のように、「めり」は「様子だ」とだいたいを推量して言う意味に用いる。「めり」は昔の文章には用いられたが、現代の文語では、普通には用いない。

基本の形	基本の形				おもな用法
	未然形	連用形	終止形	連体形	
めり	○	(めり)	めり	める	めれ ○
切言	るい	連「時」 なるに	連「時」 なるに	連「時」 なるに	

○連用形「めり」は、これに「き」「し」「しか」の附いたものがまれに用いらただけである。

問題 68 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

問題 69 「めり」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。
「めり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ変を除く)と、ラ変・形容詞・形容動詞とでは、その附く活用形を異にする。

問題 70 問題 57 の例語に「めり」を附けてみよう。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 71 問題 58 の例語に「めり」を附けてみよう。ラ変・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

〔三六〕

四月より 級長と なれり。

その 翁、頭に 雪を いたゞけり。

時計は 絶えず 時を 刻めり。

頂上に 達せるは 十一時なりき。

屏風に 描ける 絵の 美しさ 言はむ 方 なし。

右のように、「り」は「たり」と同じように、過去・完了、または口語の「ている」「である」の意味に用いる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)
おもな用法	(ム連なるに)	(キ連なるに)	切言るい	「時」連なるに	(トモに連なるに)	(命令の意味で言い切る)

○未然形・連用形・已然形・命令形は、現代の文語には用いない。

問題 72 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 73 「り」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよう。

「り」は四段活用の已然形と、サ変の未然形だけに附く。

問題 74 次の語に「り」を附けてみよう。

(一) 取る 書く 出だす

(二) 努力す 勉強す

問題 75 次の「―めり」を区別せよ。

(一) 船は 次第に 沈むめり。

(二) 船は 氷中に 沈めり。

十三 助動詞の接続と活用(四)

〔三七〕

喜びを 歌ふがごとく、行く われを 迎ふるごとし。

被害は 軽からざるがごとし。

はたして きみの 言のごとくば、予は 黙する こと 能はず。

岩石は 壁のごとく わが 行く手を さへぎる。

汽車は 風光 絵のごとき 湖畔を 走る。
最近の 暑さは 近年 まれにして、昨日のごときは 実に 三十四度に 達せり。
右のように、「ごとし」は他にたとえて言うのに用い、また、不確かな断定を表わすのに用いるが、そのほか、例示に用いることがある。口語の「ようだ」に当たる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○
おもな用法	連なるに	連なるに	切言るに	連なるに		

○「ごとし」には、已然形・命令形が無い。

○語幹「ごと」が、連用形または終止形のように用いられることがある。

月のごと、日輪 輝のかに 浮かぶ。

かつこう、かつこう、かんと鳥、こだまのごと、夢のごと。

問題 76 この活用は、用言のどの活用に似ているか。

問題 77 右の例文では、「ごとし」はどんな品詞に附いているか。

「ごとし」は動詞の連体形、またはこれに助詞「が」の附いたもの、または体言に助詞「の」の附いたものに附く。

【三】「ごとくなり」は「ごとし」に「なり」の附いたものである。

けはしき 坂を 登る こと、平地を 行くがごとくなり。

群集 潮のごとくに 押し寄す。

禍福は あざなへる なはのごとくなれば、逆境に 立てりとして 深く 嘆くべきに あらず。

「ごとし」に欠けている已然形のかわりに、この「ごとくなれ」が用いられる。

【五】らし

雨 降るらし。

雨 降るらしく 見ゆ。

雨の 降るらしき 空あひなり。

右のように、「らし」は推定する意味を表わす。口語の「らしい」がこれに当たる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らし	らしから	らしく	らし	らしき	○	○
おもな用法	連なるに	ナル・キに連なる	切言るに	連なるに		

問題 78 これに似た活用が用言にないか。

問題 79 「らし」はどんな活用形に附くか。例文によって調べよう。

「らし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 80 問題 19 の例語に「らし」を附けてみよ。

「らし」はまた、体言にも附く。

明日は 雨。天らし。

かなたに 寺らしき もの 見ゆ。

【例】 この「らし」は、古くは次のように用いた。

み雪 降る 冬は けふのみ。うぐひすの 鳴かむ 春べは あすにし あるらし。

奥山の 雪消の 水ぞ。今 増さるらし。

年月の ゆき ふりゆけば、草も 木も 老いこそすらし。白く 見ゆれば。

活用は、次のようにまとめられる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
おもな用法			切言 るい	(結) びの	(結) びの	

○連体形は「ぞ」の結び、已然形は「こそ」の結びとしてのみ用いられた。

問題 81 この「らし」はどんな活用形に附くか。例文によって調べてみよ。

この「らし」は動詞の終止形に附く。但し、ラ変の動詞には連体形に附く。

【三】 なり

若き 人に 見習はせむとて かくは するなり。

こは まことに 驚くべき ことならずや。

孔子は 正義の 念 強き 人なりき。

実朝は 頼朝の 子にして 鎌倉右大臣と いふ 歌人なり。

よき 辞書なる こと 明らかなり。

才能 ある 学徒なれども、なほ 努力 十分ならず。

右のように、「なり」は口語の断定の「だ」と同じ意味に用いる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	○
おもな用法	連ズ なるに	キ・シ に連なる	切言 るい	連「時」 なるに	連「下」 なるに	

問題 82 この活用は、用言のどの活用似ているか。

問題 83 右の例文では、「なり」はどんな品詞に附いているか。

「なり」は体言、または用言の連体形に附くのが普通である。

問題 84 次の語に「なり」を附けてみよ。

(一) 絵画 学者 汽車 汽船

十三 助動詞の接続と活用(四)

(二) 行く 見る 出づ 起く ける 死ぬ 来^来 爲^爲 あり 早し 悲し のどかなり 端然たり

○「なり」の連体形「なる」は、「にある」の意味、または「という」の意味に用いることがある。

大和なる 法隆寺。

顔回なる 者あり。

○「ごとし」に「なり」が附く場合は、連体形に附かず、その連用形に附いて、「ごとくなり」となる。

【三】「なり」はまだ、次のように用いることがある。

秋の 野に 人 まつ 虫の 声 すなり。

秋風に 初かりがねぞ 聞ゆなる。

即ち、動詞の終止形に附いて詠嘆の意味を表わす。

【三】 たり

きみは わが 良友たり。

常に よき 生徒たらざるべからず。

われ かつて この 学校の 生徒たりき。

人としての 道を 盡くすべし。

人の 友たる 者は、誠 なかるべからず。

身は 一國の 宰相たれども、その 位置に 誇る 色 なし。

従順にして 勇敢なる 生徒たれ。

右のように、「たり」も「なり」と同様、口語の断定の「だ」と同じ意味に用いる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
おもな用法	連ズなるに	キ・ンテに連なる	切言る	「時」連なるに	連ドモなるに	命令の意味で言い切る

問題 85 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 86 右の例文では、「たり」はどんな品詞に附いているか。

「たり」は体言だけに附く。

【語】 (一) こは われらの 学校なり。

われらは よき 生徒たらむ。

(二) その 建築は はなはだ 美麗なり。

前途は 洋々たらむ。

(一)は体言に、口語の「だ」に当たる助動詞「たり」「たれ」が附いたものである。(二)は形容動詞である。この二者を混同してはならない。

問題 87 次の「たり」を区別せよ。

(一) 日本第一の 名医たり。

(二) 春日 遅々たり。

(三) どうと 倒れたり。

十三 助動詞の接続と活用(四)

問題 88 次の「―なり」を区別せよ。

- (一) 水は 液体なり。
(二) 風 ひやひやかなり。

【三】

文語に用いる助動詞は、右に挙げた通りである。そうして、以上は、どんな種類の語、またはどんな活用形に附くかによって、順序立てたものである。

問題 89 (イ) 川言だけに附くのは、どの助動詞か。

(ロ) 動詞だけに附くのは、どの助動詞か。

(ハ) 動詞のほか、形容詞にも附くことのできるのは、どの助動詞か。形容動詞に附くことのできるのは、どの助動詞か。

問題 90

(イ) 川言の未然形に附くのは、どの助動詞か。

(ロ) 連用形に附くのは、どの助動詞か。

(ハ) 終止形に附くのは、どの助動詞か。

(ニ) 連体形に附くのは、どの助動詞か。

(ホ) 已然形に附くのは、どの助動詞か。

問題 91

川言や助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。すでに調べて来たように、助動詞にはいろ／＼活用の違ったものがある。故に助動詞は、その活用の仕方に基づいて、幾つかの種類に分けることができる。

【三六】

問題 92 (イ) 動詞と同じ活用、またはこれに準ずる活用をするものはどれか。それは動詞のど

の種類の活用と同じか。

(ロ) 形容詞と同じ活用、またはこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ハ) 形容動詞と同じ活用、またはこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ニ) 川言とは違った特殊の活用をするものはどれか。

(ホ) 語形変化の無いものはどれか。

【三七】 尊敬・謙讓の意味を持つ動詞、または「あり」の意味をていねいと言う動詞を、助動詞のように用いることがある。

(一) 御衣を たまふ。

(二) 歌を 奉る。

(三) 文を まゐらす。

(四) なにがしも 候ふ。

こゝに 侍り。

殿下 臨場したまふ。

深く 頼み奉る。

幼主を たすけまゐらす。

無事に 暮らし居り候。

われらも すでに 聞き侍り。

問題 93

左の文中の傍線を附けた助動詞の用法を説明せよ。

(一) されば、今 この 馬 夢にも 求め 得べしとは 思はざりき。

(二) されど、これは わらは この 家に 参りし 時、この 鏡の 下に 父の 入れ給ひて、ゆめゆめ、世の 常の 事に 用ふべからず。なんぢの 夫の 一大事 あらむ 時に 参らせよ。」とて、賜ひき。

問題 94

左の文から助動詞を抜き出し、その用法を説明せよ。

白河樂翁公、年十二にて田安邸にありしころ、麻布島居坂の戸川内膳の邸より火起り、大火といふにあらざれども、焼死せし者多かりしかば、「この火事は人の命をとりぬ坂これより上のとがはないぜん」と落首せる者ありけり。近侍の人々、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「予が詠まむには、さは言はじ。」とありければ、人々「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらすに、「第四の句を『怪我の事なり』とすべきなり。」と仰せらる。一句にて一首の意味を全く顛倒せしめ、過ちのやみがたきに出づるを明らかにせられしは、まことに驚くべきなり。

問題 95

次の文に誤りがあつたら正せ。

- (一) この所にごみ捨つるべからず。
- (二) 雨やうやく晴れり。
- (三) かれは承諾するまじ。
- (四) 奮闘ししがども、遂に等外に落ちたりき。
- (五) 三人ともよく勉強して居られる由、安心致し候

十四 助詞の種類と用法

〔一〕

花 散る。

〔二〕 花を 散らす。

〔学力 とみに 増す。〕
〔学力を 増す。〕

〔三〕 かれは 行かず。なんぢは 行け。

〔四〕 かれは 行かざれど、なんぢは 行け。

〔五〕 風 吹き出でたり。

〔六〕 風さへ 吹き出でたり。

〔七〕 こは なんぢの 本なり。

〔八〕 こは なんぢの 本なりや。

〔九〕 勇 本を 正雄に 與ふ。

〔一〇〕 正雄 本を 勇に 與ふ。

問題 1 右の例文について、助詞がどのような働きをしているか、考えてみよ。

問題 2 右の例文の助詞は、どんな品詞に附いているか。

〔三〕 文語の助詞も、口語の助詞と同じように、自立語に附いてその語と他の語との関係を示し、あるいはこれに一定の意味を添える。故に、助詞においては、どういう語に付き、どういう語にかかつて行くかを明らかにすることが大切である。この点から助詞を分類すると、口語の場合と同様、だいたい四種類になる。

〔三〕 文語の助詞は、口語のとは違った語を用いることがあり、また、同じ語を用いても、意味や用い方の違うものがある。

〔四〕 第一類

が

〔一〕 乗り手が 用心するならば、馬も けがは なかるべし。

(一)梅が 香に のつと 目の 出る 山路かな。
右のように、「が」は主語を示すほかに、文語ではまた、体言に連なる修飾語を作るために用いることがある。

の

(一)白々と あんずの 花の 咲き出でて、ことしも 春の 日ざしと なりぬ。

こは 友よりの 文よ。

(一)さながら 珊瑚珠の 輝くに 似たり。

右のように、「の」は体言に連なる修飾語を作るほかに、主語を表わすのに用いることが少なくない。

を

(一)書を 読む。

色の 美しきを 賞す。

友の 外國に 赴くを 送る。

(一)野を 過ぐ。

空を 飛ぶ。

(一)早くも 席を 離るる 者 あり。

に

(一)田舎に 住む。

朝 五時に 起き出づ。

東京に 大地震 あり。

(一)京都に 到着す。

(一)かれは 科学者に なれり。

全く 無に 帰す。

(一)見舞に 行く。

筆 買ひに 行く。

(一)雨に 降らる。

弟に 写さしむ。

右のように、「を」「に」は口語と格別の違いはない。

北へ 飛ぶ。

京都へ 去る。

右のように「へ」は、文語では主として方向を示すために用いる。

と

(一)友と 遊ぶ。

(一)氷 解けて 水と なる。

(一)これを 歌枕と いふ。

(一)叔父と 叔母とを 訪ふ。

右のように、「と」は口語と格別の違いはないが、(四)のように対等の資格で並ぶ体言を結びつける場合には、文語では「と」を一々各語の下に附けるのが本格である。しかし、誤解を招くおそれのない場合には、最後の「と」を省くこともある。また、(三)のように引用文などを受ける場合には、その終りの用言または助動詞の終止形を連体形にすることがある。

終日 業務を 取り扱はしむ。と いふ。

より

(一) 鉄より 堅き 腕 あり。

(二) 泣くより ほかの 事ぞ なき。

(三) 大阪より 帰る。

会は 六時より はじまる。

問題 3 右の(三)の例文を口語に改めよ。

右のように、「より」は口語と同じ意味を表わすほかに、口語の「から」の意味にも用いる。

にて

(一) 筆にて 書く。

汽船にて 帰る。

(二) 庭にて 遊ぶ。

(三) 病氣にて 休む。

右のように、「にて」は口語の「で」に当たる。

問題 4 次の「にて」は、この「にて」と同じか。

父は 画家にて、子は 詩人なり。

【五】 この類の助詞は、主として体言に附いて、その体言が、同じ文中の他の語に対して、どんな関係に立つかを示すものである。これを格助詞ということがある。

【六】 文語では、「をして」「をもつて」「について」「によって」「において」「における」などの言葉を、第一類の助詞と同様に用いる。

弟をして 先発せしむ。

かれの 沈着なるは これをもつて 知るべし。

わが 國の 経済について 語らむ。

無線電信によつて 危急を 報ず。

会議は 東京において 開催す。

平安時代における 國文學の 發達は、仮名の 發生に 負ふ ところ 多し。

ば

(甲) 名にし 負はば、言問はむ 都島、わが 思ふ 人は ありや なしやと。

近くば、寄つて、目にも 見よ。

(乙) 風 吹けば、波 立つ。

遠き 慮り なければ、近き 憂ひ あり。

けふは、雨 降れば、外出せず。

問題 5 (甲)の例文で「ば」は用言のどんな活用形に附いているか。(乙)の例文ではどうか。

問題 6 右の例文を口語に改めよ。

右のように、文語では、「ば」は未然形に附くものと已然形に附くものがある。未然形に附いた場合は、ある事がらを仮定して、それを條件とすることを表わす。已然形に附いた場合は、確定した事がらを條件とすることを表わすほか、「から」「ので」の意味をも表わす。

とも

人 騒ぐとも いさゝかも 動ぜず。

いかに 複雑なりとも 解決せざる こと あらじ。
いかに 心は 堅くとも、身は 鉄石に あらず。
苦しくとも 忍ぶべし。

問題 7 右の例文で「とも」は、動詞のどんな活用形に附いているか。形容動詞にはどうか。
形容詞にはどうか。

問題 8 右の例文を口語に改めよ。

「とも」は動詞・形容動詞の終止形、形容詞の未然形「く」「しく」に附く。また、ある種の助動詞にはその終止形に、ある種の助動詞にはその未然形に附く。口語の「ても」の意味に用ゐる。

○古くは、「とも」の意味で「と」を用いたことがある。

絵に 描くと 筆も 及ばじ。

ども

(一)手を 分ちて 探りたれども、遂に 発見し 得ざりき。

近けれどども 車にて 行きぬ。

(二)樹 静かならんと 欲すれども 風 やまず、子 養はんと 欲すれども 親 待たず。

呼べど 答へず、さがせど 見えず。

問題 9 右の例文で「ど」「ども」は、用言のどんな活用形に附いているか。

問題 10 右の例文を口語に改めよ。

「ど」「ども」は、用言及び助動詞の已然形に附いて、口語の「けれども」または「ても」の意味に用ゐる。

○なお、「ども」「どども」のかわりに、「も」を用いることがある。

いかなる 事由 あるも、議場に 入る ことを 許さず。

日夜まで 搜索せしも、遂に 発見する こと 能はざりき。

問題 11 右の文を口語に改めよ。

が

日 暮るるまで 待ちたるが、遂に 友は 來たらざりき。

保己一は 五歳の 時 めくらと なりしが、後には 名高き 学者と なれり。

問題 12 次の「一が」を区別せよ。

(一)冬に 咲くが おもしろきなり。

(二)こゝ かしこ さがしたるが、見えざりき。

に

雨 激しきに 出で行きけり。

未だ 一月も たたざるに、かの 絵師は 突然 歸り來たれり。

問題 13 次の「一に」を区別せよ。

(一)言はぬは 言ふに まさる。

(二)わざ／＼ 訪ひしに 不在なりき。

を

かくとは 思はざりしを、さても うれしき 心かな。

問題 14 次の「」を「」を区別せよ。

(一) 苦しきを 忍ぶ。

(二) 年 なほ 若きを、いかで さる 任に 堪へむ。

問題 15 右の例文で「が」「に」「を」は、用言または助動詞のどんな活用形に附いているか。

問題 16 右の「が」「に」「を」の例文を口語に改めよ。

「が」「に」「を」は、いずれも用言及び助動詞の連体形に附いて、口語第二類の助詞「が」「の」「に」の意味に用いる。

て

雨 降りて、地 固まる。

猛火を くぐつて 消防に 努む。

赤くて 大きな 花。

四海 波 静かにて、天が下 穏やかなり。

かれは 小説家にて、且つ 俳人なり。

問題 17 右の例文で「て」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いているか。

「て」は動詞の連用形(あるいはその音便の形)、形容詞の連用形「く」「しく」「あるいはその

音便の形)、形容動詞ナリ活用の連用形「に」に附く。また、助動詞の連用形に附く。また、この「て」は次のようにも用いられる。

國に 帰らんとて 出発せり。

昔 天然に 祇園精舎とて 名高き 寺 ありき。

して

山 高くして 白雲 峰を 埋め、谷 深くして 万丈の 青岩 道を さへきる。

氣候 溫和にして、産物 豊かなり。

歴然として、明らかなり。

問題 18 右の例文で「して」は、用言のどんな活用形に附いているか。

「して」は、形容詞の連用形「く」「しく」、形容動詞の連用形「に」「と」に附く。また、ある種の助動詞の連用形に附く。

て

寝も せで 夜を 明かしぬ。

病 快からで 困じぬ。

内容も 複雑ならで たちまちのうちに 読破せり。

問題 19 右の例文で「で」は、用言のどんな活用形に附いているか。

問題 20 右の例文を口語に改めよ。

「で」は動詞及び形容動詞の未然形、形容詞の未然形「から」「しから」に附く。また、助動

詞の未然形に附く。助詞「て」に打消の意味が加わつたもので、口語の「ないで」に当たる。

読みつつ 書く。

泣きつつ 語る。

問題 21 右の例文で「つつ」は、動詞のどんな活用形に附いているか。

問題 22 右の例文を口語に改めよ。

「つつ」は動詞及びある種の助動詞の連用形に附いて、口語の「ながら」の意味に用いる。

○なお、「処」「間」のような名詞が、候文などでは第二類の助詞のように用いられることがある。
久しく病氣にて 引きこもり居り候処、今回 全快 致し候間、御安心 下されたく 候。

「へ」 この類の助詞は用言や助動詞に附いて、接続詞のように、上の語の意味を、下の用言、または用言に準ずるものに続けるものである。これを接続助詞といふことがある。

【九】 第三類

は

鯨は 魚には あらず。

美しくは 見ゆれど、欲しとは 覺えず。

知りては あれど、言はぬなり。

も

(一) われも 知らず。

寒くも なし。

(二) 老いも 若きも 喜ぶ。

右のように、「は」「も」は口語と格別の違いはない。

ぞ

なごり なく 散るぞ めでたき。

風の 音にぞ 驚かれぬる。

なんぢの ためには よき 相手ぞ。

などて かくは するぞ。

なむ(なん)

柿本人麻呂なむ 歌の 聖なりける。

や

花や とき、春や おそき。

ありや なしや。

楽しからずや。

か

たれか ある。

かの 扇を 射落す 者は なきか。

「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受け、文を結ぶ時は、必ずその連体形を用いる。「ぞ」「なむ(なん)」は強く指して言うのに用い、「や」「か」は疑問

の意味を表わす。また、「ぞ」「や」「か」は、文の終りにも用いる。「ぞ」は体言、または用言及び助動詞の連体形に、「や」「か」は用言及び助動詞の終止形に、「か」は用言及び助動詞の連体形に附く。「や」「か」はまた、反語を示す時がある。この場合には、「やは」「かは」となることがある。

むなしく 月日をや(やは) すごすべき。

散る 花の 鳴くにし とする ものならば、われ うぐひすに 劣らましやは。

たれか(かは) これに 感泣せざらむ。

花は 盛りに、月は くま なきをのみ 見る ものかは。

こそ

底ひ なき 淵やは 騒ぐ。山川の 浅き 瀬にこそ あだ波は 立て。

なんぢは、聞きしにも 似ず 手こそ 荒らけれ。

「こそ」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその已然形を用いる。この「こそ」は、特に事物を取り立てて言うのに用いる。

右のように、「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受けて連体形で文を結び、「こそ」を受けて已然形で文を結ぶのを、係結の法則という。そうして、右のように用いられる「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」「こそ」に係りの助詞ということがある。

だに

紙 一枚だに なし。

手にだに 取らず。

問題 23 右の例文を口語に改めよ。

すら

大すら 恩を 知る。

見るにすら 目 くるる 心地す。

問題 24 右の例文を口語に改めよ。

右のように、「だに」「すら」は、口語の「さえ」「でも」などの意味に用い、軽いものを挙げて、それより重いものを推測させるのに用いる。

さく

雨 降り、風さく 吹きぬ。

残る ひとり子にさく 別れたら。

右のように、「さく」は口語の「までも」の意味に用いる。

し

花をし 見れば 物思ひも なし。

右のように、「し」は意味を強めるのに用いる。

問題 25 次の「し」を区別せよ。

(一) 咲かず なりにし 櫻。

(二) 反対する 者 なきにしもあらず。

問題 26 次の「しか」を区別せよ。

- (一) 海は 見えざりしか。
- (二) 海こそ 見えざりしか。

のみ

かれのみ 喜ばざる はず なし。
残れるは これのみなり。

問題 27 右の例文を口語に改めよ。

右のように、「のみ」は口語の「だけ」「ばかり」の意味に用いる。

ばかり

月影ばかり 昔に 変はらず。

幅 五尺ばかりの 小川 あり。

右のように、「ばかり」は口語の「だけ」または「ほど」の意味に用いる。

まで

東京まで 行く。

など

絵など 描きて 遊ぶ。

家 貧しくして 苦しむなどは 世の 事なり。

右のように、「まで」「など」は口語と格別の違いはない。「まで」は動作・作用などの及ぶ限度

を示し、「など」は例示するのに用いる。

〔10〕この類の助詞には、体言や用言、その他の／＼の語に附いて副詞のように下の語にかゝって行く用法がある。これを副助詞といふことがある。

〔11〕第四類

な

ゆめ 忘るな。

いたく 罪 作り給ふな。

な

な 行きそ。

な 忘れそ。

問題 28 例文で「な」及び「なそ」の「そ」は、動詞のどんな活用形に附いているか。

右のように、「な」「なそ」は禁止の意味を表わす。「な」は動詞及びある種の助動詞の終止形に附く。但し、ラ変の動詞には、その連体形に附く。

女々しくは あるな。

「なそ」の「そ」は、動詞及びある種の助動詞の連用形に附く。但し、カ変・サ変の動詞には、その未然形に附く。

なこ(來)そ。

なせ(爲)そ。

ばや

行きて 取らばや。

今 しばし 命 あらばや。

問題 29 右の例文で「ばや」は、どんな活用形に附いているか。

右のように、「ばや」は自己に關した事からについての希望を表わす。動詞及びある種の助動詞の未然形に附く。

なむ(なん)

いま 一たびの 御幸^{みゆき} 待たなむ。

雲だにも 心 あらなむ。

もろこしも 天の 下にぞ ありと 聞く。照る 日の 本を 忘れざらなむ。

問題 30 右の例文で「なむ(なん)」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いているか。

右のように、「なむ(なん)」は動詞・形容詞及びある種の助動詞の未然形に附く。他に対してあつらえ望む意味を表わす。

○この「なむ(なん)」を係りの助動詞として用いる「なむ(なん)」と區別するために、願望の「なむ(なん)」といふことがある。

問題 31 次の「—なむ」を區別せよ。

(一) 帰らなむ。

(二) 帰りなむ。

がな

(三) 夢のやうになむ。

昔を 今に なす よしもがな。

右のように、「がな」は希望を表わすもので、助詞「も」に附くことが多い。

かな

けなげなる をのこかな。

富士 ひとつ うづみ 残して 若葉かな。

あゝ、悲しきかな。

右のように、「かな」は体言、または用言及び助動詞の連体形に附いて感動の意味を表わす。

○この「かな」は古くは「かも」と言った。

かし

幸^{さいち} あれかしと 祈る。

來ても 見よかし。

右のように、「かし」は言ひ切つた形に附いて意味を強めるのに用いる。

や

あな、うれしや。

行けや、行け。

いでや、目に 物 見せむ。

いかに 梶原殿。この 川は 西國一の 大川ぞや。
古池や、かはづ とびこむ 水の 音。

な

せみの 声 聞けば 悲しな。

よ

・ 少納言よ、香炉峰の 雪は いかならむ。

その 芽の みづ／＼しき 緑よ。

右のように、「や」「な」「よ」は共に感動の意味を表わす。

〔三〕 この類の助詞は、体言や用言、その他いろ／＼の語に付き、主として文の終りにあつて、疑問・禁止・詠嘆・感動などを表わすものである。これを終助詞といふことがある。この類の助詞のうち、「な」「そ」「ばや」「なむ」「がな」「かし」などは、現代の文語では普通には用いない。

問題 32 (イ)体言、または体言に準ずるものにだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

(ロ)用言や助動詞にだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

問題 33 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) 捨ておけば、ほどなく生き返らむ。

(二) かれこそ第一の物理学者なりし。

(三) 人や出づと待ち受けたリ。

(四) 一粒の米さへ得られざる所なり。

(五) 海菴き上ぐる龍巻も、起れば起れ、驚かし。

〔三〕 今まで調べて来たことによつて、文語では品詞が幾つあるかということ、單語には活用のあるものと無いものがあること、活用の有る單語はどのように活用するかということ、單語には自立語と附屬語とがあつて、自立語と附屬語とが結びつく時どのような結びつき方をするかということなどが、わかつたはずである。

十五 文節の構造

〔一〕 (甲) 雨の 降り方だけでも 実に いろ／＼さま／＼の 降り方が あつて、それを 区別する 名称が、それに 應じて 分化して いる 点でも、日本は、おそらく 世界中 随一では ないかと 思う。試みに、「春雨」「さみだれ」「しぐれ」の 適切な 訳語を 外國語に、求めると したら、相當な 困惑を 経験するで あらうと 思われる。

(乙) 沈黙の 冬は 去れり。しかも、春 なほ はなはだ 浅し。梅は 未だ 咲かず。つぼみ おしなべて 固し。されど、南を 受けたる 崖下など、たま／＼ 白梅の 数輪 咲きそめたるを 見る。(文語)

問題 1 右の例文の各文節を單語に分け、且つ自立語と附屬語とを区別せよ。

〔三〕 右の例文によつても明らかのように、文節は一つの單語でできているものもあり、二つ以上の單語でできているものもある。前者は自立語だけでできているものがあり、後者は、自立語に附屬語が一つ、または二つ以上附いてできている。

〔三〕 自立語だけでできている文節には、次のようなものがある。

(甲) 用言だけで

(イ) 月が照る。

思い出は懐かしい。

氣候 溫暖なり。(文語)

(ロ) 責任を重んじ、名譽を尊ぶべし。(文語)

夏は涼しく、冬は暖かだそうだ。

草深く繁れり。(文語)

穏やかに話した。

場内 騒然となりぬ。(文語)

(ハ) 賞すること 大方ならず。(文語)

懇切な訓辭があつた。

かなたに美しき城 見えたり。(文語)
炎々たる火勢、堂宇を包めり。(文語)

(ニ) 波が静かなら 舟を出そう。

(ホ) 元氣を出せ。

なんぢ、つゝがなかれ。(文語)

態度は決然たれ。(文語)

(ヘ) おゝ、結構、結構。

あゝ、いた(痛)。

問題 2 以上の各文節は、用言のどんな活用形、またはどんな形を用いているか。

(乙) 体言だけで

月 明らかに、星 まれなり。(文語)

毎日 畑へ出る。

弟子の僧 ぶたり ありけり。(文語)

なんぢ、行け。(文語)

(丙) 副詞だけで

ゆつくり 歩く。

やをら 立ち上がりぬ。(文語)

(丁) 連体詞だけで

これ、いはゆる 黒潮なり。(文語)

たつたひとみ、後に 取り残された。

(戊) 接続詞だけで

秋の空は 実に 高い。そうして 色が 深い。

筆記には ペン または 鉛筆を 使用すべし。(文語)

(己) 感動詞だけで

はい、承知しました。

あな、樂し。(文語)

〔四〕 自立語に附屬語が附いてできている文節には、次のようなものがある。

(甲) 用言に

(イ) 決して 忘れるな。

八時に 登校すべし。(文語)

あら、勇ましや。(文語)

ずいぶん きれいだそうだ。

(ロ)利を追はず、名を求めず。(文語)

さぞ おもしろかるう。

進歩も すみやかならむ。(文語)

(ハ)もう 客は帰つた。

細くて 急な道が続く。

(ニ)手に 取るように 見える。

四辺の 静かなるが いと 快し。(文語)

(ホ)遂に 大学者と なれり。(文語)

(ヘ)進めや 者ども。(文語)

(ト)非常に おもしろそう。

問題3 以上の各文節は、用言のどんな活用形、またはどんな形を用いているか。

(乙)体言に

火山が 煙を 吐いた。

全く 完成だ。

(丙)副詞に

たちまちに 復興した。

目的地は まだだ。

(丁)連体詞に

近くは 直ちに 駆けつけよ。(文語)

花 摘みに 行く。(文語)

風雷 烈しかりけり。(文語)

強きを くじき、弱きを 助く。(文語)

慢心を 起せば 進歩は とまる。

この 豊かなる みのりを 見よかし。(文語)

高原の 朝は さわやかです。

かれも 人の 子なり。(文語)

われこそ 斎藤実盛よ。(文語)

しばしの 別れを 惜しむ。(文語)

このね 本が それなんだよ。

(戊)接続詞に

それにね、先生も 御出席に なつたよ。

(己)感動詞に

いでや、目に 物 見せむ。(文語)

〔五〕 自立語に附く附属語は、幾つか重なることがある。

(甲)助動詞が重なる

一歩も 退こうとは しませんでした。

われらは 誠実の 人たらざるべからず。(文語)

問題4 右は助動詞が幾つ重なっているか。

(乙)助詞が重なる

海流には 暖かいのと 冷たいのが ある。

考ふる ところ なきにしも あらず。(文語)

問題5 右は助詞が幾つ重なっているか。

(丙)助動詞と助詞が重なる

春 来たりなば 病も 快からむ。(文語)

すぐ 出かけたが、少し 遅かづた。

これは 私のです。 過ぎたるは なほ 及ばざるがごとし。(文語)

穴が あれば はいりたいぐらいだ。

問題 6 この章のはじめの例文について、二つ以上の単語でできている文節を取り出し、どんな品詞でできているかを明らかにせよ。

十六 文節と文節との関係

〔一〕 文節は、これをたゞ並べただけでは意味をなさない。一定の関係に従って並べて、はじめて意味をなす。その関係には、幾つかの種類がある。

〔二〕 花が 咲く。

風が 涼しい。

あれが 槍だ。

右の文における二つの文節は、それ／＼、何がどうするか、何がどんなであるか、何が何であるかを示しているのであって、これら二つの文節は、いずれも主語述語の関係で連なっている。どうするか、どんなであるか、何であるかを示すものを述語、何が示すものを主語という。

問題 1 右の例の各文節が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔三〕 かれも 人なり。(文語)

鳥だに 鳴かず。(文語)

雨さへ 多し。(文語)

なんぢ 何者ぞ。(文語)

新しきが よし。(文語)

花の 散るを ながめぬ。(文語)

頭脳 鋭敏に、意志 強固なり。(文語)

言ふは 易く、行ふは 難し。(文語)

笑はるるぞ 恥づかしき。(文語) 沈着なるこそ 肝要なれ。(文語)

右の例の二つの文節も、それ／＼主語述語の関係で連なっている。

問題 2 右の例の主語及び述語が、どんな品詞でできているかを調べよ。

問題 3 右の例を口語に改めて、その主語及び述語がどんな品詞でできているかを調べよ。

〔四〕 風が たいへん 涼しい。

赤い 花が 咲く。

右の文における「風が」と「涼しい」、「花が」と「咲く」とは、それ／＼主語述語の関係で連なっている。ところが、「たいへん」「赤い」は、「涼しい」「花が」に連なつて、どんなに涼しいか、どんな花であるかを示して、「涼しい」「花」の意味を限定している。即ち、これら二つの文節は、修飾被修飾の関係で連なっている。「たいへん」「赤い」のようなものを修飾語、「涼しい」「花が」のようなものを被修飾語という。

問題 4 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔五〕 (甲) 山 すこぶる 高し。(文語)

夜來の 雨は からりと はれた。

(乙)(イ) 千鳥の 声 遠く 聞えつ。(文語)

さびしくも 思はず。(文語)

熱心に 勉強した。

(ロ) 言はぬは 言ふに まさる。(文語)

寒いのを がまんする。

憂ひは あらかじめ 憂へざるより 起る。(文語)

(ハ)驚いて 立ち上がった。 苦しくとも 忍耐せよ。(文語)

簡單なれば 覚えやすし。(文語)

(丙)(イ)約 ニメートル 陥没せり。(文語)

(ロ)飛行機は 東へ 向かう。

虫を とらえる。

米が 酒と なる。

試験は きのう 終った。

かれは 詩に 巧みなり。(文語)

千里の 道も 一歩より はじまる。(文語)

右の例の二つの文飾も、それ／＼修飾被修飾の関係で連なっている。

問題 5 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな品詞でできているかを調べよ。

右の例の修飾語のように、用言を修飾するものを連用修飾語という。

〔六〕(甲) ある 夜には かに 出発せり。(文語)

(乙) この 樹には 小さな 実が 生る。

(丙) 躍る 心を 押し静めた。

けなげなる 少年なりき。(文語)

(丙) 北の 風 吹く。(文語)

だが 宿なりや。(文語)

おもしろの 景色よ。(文語)

むつせじき 友 ひとり あり。(文語)

働かない 者は ひとりも 居ない。

きょうまでの 成績は 極めて よし。

たま／＼の 面会が 待ち遠しい。

右の例の二つの文飾も、それ／＼修飾被修飾の関係で連なっている。

問題 6 右の例の修飾語及び被修飾語が、どんな品詞でできているかを調べよ。

右の例の修飾語のように、体言、またはこれに附属語の附いた文飾に連なつて、体言を修飾するものを連体修飾語という。

〔七〕 山は 高くて けわしい。

穏やかで 謙譲な 人で あつた。

才と 徳とを 兼ね備えた 人で ある。

右の文の二つの文飾は、主語述語の関係でもなく、修飾被修飾の関係でもない。二つの文飾が対等の関係で連なっている。これを対等の関係にある文飾という。

問題 7 右の例の対等の関係で連なる文飾が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔八〕(甲) 稲は 発育し みのれり。(文語)

赤く 美しい 花が 咲いた。

(乙) 米 麦 生糸は、この 地方の 重要産物で ある。

秀吉、家康、利家を 招く。(文語) 偉人 賢人の 傳記を 読む。(文語)

絵画と 彫刻の 展覧会が ある。 視察團は きょうか あす 到着する。

あれと これと、どちらが よいか。

右の例の二つの文飾も、それ／＼対等の関係で連なっている。

問題 8 右の対等の関係で連なる文飾が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔九〕 電燈は 消えて いる。

まことに尊いのは、母の力である。

右の文の二つの文節のうち、上の文節が主たる意味を表わし、下の文節はこれに附属して、ある意味を添えている。これは用言と助動詞との関係に似ている。これを附属の関係にある文節という。

問題 9 右の例の附属の関係で連なる文節が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔10〕 (甲) 弟は眠ってしまつた。 あけてある戸は、みんなしめて下さい。

氣候も悪くはない。 それは確かでございます。

論旨も明白にはあらず。(文語) 御名こそ承りたく候へ。(文語)

(乙) それはなまやさしい仕事ではなかつた。

恩を知らざる者は人にあらず。(文語)

右の例の二つの文節も附属の関係で連なっている。附属の関係で連なる二つの文節は、その間に他の文節をさしはさむことは極めてまれであつて、この二つの文節がいつもほとんど一つの文節のように用いられる。

問題 10 右の例の附属の関係で連なる文節が、どんな品詞でできているかを調べよ。

〔11〕 (甲) さあ、もう一息だ。 はい、私も参ります。

いかに、それなるは 何人にて おはすぞ。(文語)

(乙) 太郎よ、なんぢも来たれ。(文語)

九月一日、私は一生この日を忘れないでしょう。

(丙) 試みはしばしば失敗したり。されど、かれはいさゝかも屈せざりき。(文語)

右の文節は、他の、ある一つの文節とは直接の関係がなく、比較的独立して用いられている。また、

古事記 並びに 万葉集は、わが國の二大古典なり。(文語)

ぼたんの花は、大きくそうして美しい。

家は、かやぶきか または板ぶきだ。

の「並びに」「そして」「または」は、前後の文節が対等の関係で連なることを示すものである。

以上、これらの文節の、他の文節との関係の仕方を見るに、主語述語の関係でもなく、修飾被修飾の関係でもない。また、対等の関係でもなく、附属の関係でもない。こういうものを独立語という。

問題 11 右の例の独立語の文節が、どんな品詞でできているかを調べよ。

問題 12 次の文の傍線を引いた文節と文節とは、どんな関係にあるか。

(一) 湯が 水に なる。

(二) 樺太犬は、恐ろしく 元氣が よい。

(三) かれは 画家で 詩人だ。た。

(四) そこに 植えて あるのは なすだ。

(五) 途中での 出来事を 話して ごろんなさい。

(六) 落花は、てふの 舞ふに 似たり。(文語)

(七) 野口英世は、世界に 誇るべき 科学者なり。(文語)

(八) あつばれ、運の 盡きぬる やつばらかな。(文語)

十七 文の構造

【一】 文は文節からできている。

美しき 花 咲く。(文語)

美しく 咲きぬ。(文語)

こゝへ 来い。

花は もう 散ったか。

みんな 山に 行こうよ。

右の文における「咲く」「咲きぬ」「来い」「散ったか」「行こうよ」は、そこで言い切りになる文節であり、「美しき」「花」「美しく」「こゝへ」「花は」「もう」「みんな」「山に」は、下へ続く文節である。右のように、文節には切れる文節と続く文節とがある。そうして、一つの文には切れる文節がその最後に必ず一つあつて、そこで文が完結する。

続く文節は、主語述語の関係、修飾被修飾の関係、対等の関係、附属の關係のいずれかで他の文節と結合する。独立語は、他の一つの文節との関係を見ると、比較的独立しているけれども、意味の上からは下の文節に続いて行くので、これも続く文節と見ることが出来る。

問題 1 右の例文中の切れる文節は、どんな品詞でできているか。活用の有るものはその活用形を、助詞はその種類を言え。

問題 2 続く文節はどうか。

【二】 文節の切れ続きは、

一「咲く」「咲きぬ」「来い」「美しき」「美しく」のように、活用形によって示される。

一「散ったか」「行こうよ」「こゝへ」「花は」「みんな」「山に」のように、助詞によって示される。

一「花」「もう」のように、文節自身には特別のしるしがないが、他の文節との先後、及び意味上の関係によって知られる。

【三】 火事が起つた場合に、「火事だ。」と叫んだとすると、この「火事だ。」は一つの文である。これは一つの文節でできている。

(お前も 行くか。) は。

(お前も 行くか。) 行きます。

見よ。

うれしな。

勉強するとも。

これらも一文節でできている文である。このように、一文節でできた文は、切れる文節だけでできている。

問題 3 右の例文について、それがどんな品詞でできているかを調べよ。

【四】 二つ以上の文節でできている文には、切れる文節のほかに、続く文節がある。一つの文では、

切れる文節はたゞ一つであつて、他はすべて続く文節である。そうして、これらの文節が一定の順序に並び、最後の切れる文節に到つて文が終る。

問題 4 次の文について、主語と述語、修飾語と被修飾語、及び独立語を区別せよ。

(一) 夜、いたくふけたり。(文語)

(二) 学徒の 本分は 勉学だ。

(三) 一月一日、この日は一年のはじめです。

(四) 水は、方円の器に随ふ。(文語) (水随方圓之器)

(五) 善を責むるは、ほんたうの 道なり。(文語) (責善、朋友之道也。)

右によつても明らかになうに、一文中の文節の並び方は、次の通りである。

一 主語と述語とは、主語が前に、述語が後に来る。

二 修飾語と被修飾語とは、修飾語が前に、被修飾語が後に来る。

一 文節を接続する働きをするもの以外の独立語は、文の最初に来る。

〔五〕 一つの文節が他の文節と結合する場合に、前の文節は後の文節に連なるまたは係るといい、後の文節は前の文節を受けるという。

〔六〕 幾つかの文節が結合してできた文においては、

(甲) 美しい—花が—咲く。

準備の—整ふを—待て。(文語)

のように、一つの文節がすぐ次の文節と結合し、それが更にすぐ次の文節と結合するというよう

に、順次に結合して行くか、それとも、

(乙) 花が—美しく—咲く。

われ—。なんぢの—才能を—試みむ。(文語)

のように、一つの文節が、直後の文節でなく、幾つかの文節を隔てて、後の文節に連なつて行くかである。

(乙)の場合には、二つの違った文節が、同じ一つの文節に係り、一つの文節が、二つの違った文節を受けるのである。そうして、この二つの違った文節は、直接には関係がなく、たゞ同一の文節に連なるということによつて、間接の連絡があるばかりである。(三つ以上の場合も同様である。)しかし、このようにして文節が、あるいは直接に、あるいは間接に、他の文節につながつて、その意味が次第にまとまつて行くのである。

〔七〕 以上のような方法によつて、各文節の意味が順々につながつて行き、最後の切れる文節に到つて、すべての意味が統一されて文が完結する。

文—読む—暇も—なし。(文語)

白く—大きな—木星が—見える。

東京—京都—大阪は、—日本の—三大都市で—ある。

かれは—。あらしや—波と—戦ひ通した。

子供が「庭で」。「楽しそうに」遊んで「いる」。

つばめの「」。か細い「」。小さい「」。からだには「」。その「時の」寒さは「」。堪えがたかった。

ふるきを「たづねて、」。新しきを「」。知る。「(文語)」

建物は「簡素では」あるが、「」。極めて「」。清潔で「」。ある。

春は「来たれども、」。寒さ「」。未だ「」。去らず。「(文語)」

問題 5 右の例の各文節が、他の文節とどんな関係で連なっているかを調べよ。

〔八〕 文は、切れる文節がその最後にあるのが普通である。ところが、場合によって、切れる文節が普通の位置を変えることがある。

明かるい 海だ、どこまでも。

問はばや、遠き 世々の 跡。「(文語)」

言ふなかれ、今日 学ばずして 来日 ありと。「(文語)」

また、文は、切れる文節が一つあるのが普通である。ところが、切れる文節を言い表わさないことがある。

(さあ 出かけよう。) きみは。

どうぞ お大事に。

名月や 池を めぐりて 夜もすがら。「(文語)」

一寸の 虫にも、五分の 魂。「(文語)」

問題 6 右の例は、どんな切れる文節を補い得るか。

問題 7 次の文の構造を調べよ。

(一) それは、日本に「二つと」ない「りっぱな」塔で「ある」。

(二) まわり廊下に「囲まれた」中庭に「ある」夢殿は、わが「國で」一番「美しい」八角堂だといわれて「いる」。

(三) 一点の「雲も」なく「暗れ渡れる」青空は「最も」人の「心を」さはやかならしむ。「(文語)」

(四) 蒸し暑き「夏の」夕べ、涼み台を「いちじくの下に」移して、「一家」晩餐に「團欒」すれば、竹葉をよぎて「涼氣」おのづから「盤上に」ほとばしる。「(文語)」

十八 文の種類

〔一〕 夏が 来た。

きょうは 涼し。

会場は こゝだ。

汽車は まだ 出ない。

あすは 雨が 降るだろう。

早く 行こう。

十八 文の種類

右の例のように、断定(肯定・否定)や推量・決意等の意味を述べるだけの文を平敘文という。

問題1 右の例文を文語に改めよ。

〔三〕 平敘文は、用言または助動詞の終止形で終るのが普通である。しかし、文語では、これらの語が、助詞「ぞ」「なむ」「こそ」を受けて文を終止する場合には連体形を用い、「こそ」を受けて終止する場合には已然形を用いる。即ち、係結の法則が行われる。

風 吹きぬ。

風なむ 吹きぬる。

花 咲きつ。

花ぞ 咲きつる。

朝霧 流る。

朝霧こそ 流るれ。

〔三〕 もう 帰りましょうか。

何を持って来た。

源氏が 勢は いかほど あるぞ。(文語)

なんぢは 物に 狂ひて かくは 言ふか。(文語)

なんぢは かく 語りしに あらずや。(文語)

右の例のように、疑問の意を表わす文、及び反語の意を表わす文を疑問文という。

〔四〕 疑問文は、疑問を表わす語があり、または助詞「か」「口語・文語」「や」「ぞ」(文語)などで終るのが普通である。但し、口語では疑問を表わす語を含まず、たゞ、言葉の調子で疑問の意を表わすことがある。

文語では、疑問文に疑問の助詞「か」「や」がある時、これを受けて文を終止する用言または助

動詞は、連体形を用いる。

たれか ある。

月や 出でたる。

これも係結の法則である。

〔五〕 文語では、右のように平敘文及び疑問文に係結の法則が行われる。他の種類の文には行われない。平敘文には「ぞ」「なむ」「こそ」の係りの助詞、疑問文には「か」「や」が用いられる。

〔六〕 係結の法則は、活用する語で文を終止する時に限って行われる。それ故、活用する語が助詞をとり、または他の語に連なる場合には適用されない。

憂き 世には 長らへじとぞ 思へども……

いにしへは 車 もたげよ、火 かへげよとこそ いひしを……

また、「ぞ」「なむ」「こそ」を受ける用言を言い表わさない場合も少なくなる。

田植多の 準備に いそがはしとぞ (聞く)。

人々は たゞ 驚き恐るのみなりとなむ (いふ)。

いかさま さも あるべきにこそ (あれ)。

〔七〕 帽子を お脱ぎなさい。

早く しろ。

決して 油断するな。

悪を 友と するなかれ。善を 友と せよ。(文語)

いたく な嘆き給ひそ。(文語)

便 あらば かの 島へも 渡らばや。(文語)

右の例のように、命令・禁止、または願望の意を表わす文を命令文という。

〔八〕 命令文は、用言または助動詞の命令形、禁止の助詞「な」(口語・文語)、「なそ」(文語)、または願望の助詞「ばや」「なむ」(文語)で終止する。

命令文では、主語を言い表わさないことが多い。

〔九〕 あゝ、愉快、愉快。

すばらしい 元氣だなあ。

それは 困りましたね。

かれの 働きの いかに めざましかりしよ。(文語)

天地は 大いなるかな。(文語)

右の例のように、感動の意を表わす文を感動文という。

〔一〇〕 感動文は、文のはじめに感動詞の來ることが多く、感動詞だけから成ることもある。また、文の終りに感動を表わす助詞のあるのが普通である。また、感動文では形容詞や形容動詞の語幹をそのまま用いることがある。

〔一一〕 右のように、文には、平敘文・疑問文・命令文・感動文の四種類がある。そうして、概して文の最後の切れる文節にそれ／＼特徴が見られる。

問題 2 各種の文の切れる文節にどんな特徴があるか。

問題 3 次の文は、どの種類に属するかを え。また、係結の法則の行われているものがあつたら、これを指摘せよ。

(一) 東海丸の船長久田佐助は、目前に迫るこの危急を避けるのに全力を盡くしたが、しかし、もう遅かった。たちまち一大音響と共に、ロシア汽船の船首は、東海丸の船腹を破ってしまった。東海丸の船体は、ぐっと傾いた。

すわ、一大事。船長は、さっそく乗組員に命じて持ち場に就かせた。五隻のボートはおろされた。船客も船員も、みんなボートに乗った。船長は、何度か念を押すように言った。「みんな乗ったか。」「乗りました。」「ひとりも残っていないな。」「残っておりません。」「残ったのは、たゞ船長ひとりであった。

「船長、早くボートへ乗って下さい。」だが、返事はなかった。船員のひとりには、たまたまなくて駆けつけた。見れば、かれのからだは、旗のひもで、しっかりと欄干に結びつけられている。沈んで行く船と運命を共にしようとする覚悟なのだ。船長はおごそかに答えた。「船と運命を共にするのは、船長の義務だ。お前は早く逃げろ。ひとりでも多く助かってくれるのが、私に対するお前たちの務めではないか。」

(二) 「やあ、助かってよかったね。だが、あの熊がきみの耳に口をつけて、何かささやいていたようだね。何と言ったの。」「うん、熊が『危険の迫った時に、友達を見捨てるような者とはいっしょに旅をするな。』と教えてくれたんだ。

(三) 「鹿の通はむする所を、馬の通はざるべきやうやある。なんち、案内者せよ。」「この身は年老いていかにもかなひ候ふまじ。」「さて、なんちに子はなきか。」「さぶらふ。(文語)

(第二表) 口語及び文語動詞活用表

上	段				四	種類
						行名
						例語
						語幹
						未然
						連用
						終止
						連体
						假定
						命令

語

段 一 上	段下	ラ	ナ	段	四	種類
	(カ)	変	変			行名
						例語
						語幹
						未然
						連用
						終止
						連体
						已然
						命令

文 語

[illegible]

百十二

		例語	口
		語幹	
		未然	
		連用	
		終止	
		連体	
		假定	
		命令	
シク活用	ク活用	種類	文
		例語	
		語幹	
		未然	
		連用	
		終止	
		連体	
		已然	
		命令	語

張

		例語	口
		諸聲	
		未然	
		連用	
		終止	
		連体	
		假定	
		命令	
タリ活用	ナリ活用	種類	
		例語	
		諸聲	文
		未然	
		連用	
		終止	
		連体	
		已然	
		命令	

語形変化の もの	特殊型	形容詞動詞型	形容詞型	動詞型	種類
					語
					未然
					連用
					終止
					連体
					假定
					命令
					接続
					語
					未然
					連用
					終止
					連体
					已然
					命令
					接続

(第六表) 口語及び文語助詞接続表

文				口				体言に
類四第	類三第	類二第	類一第	類四第	類三第	類二第	類一第	
								未然形
								連用形
								終止形
								連体形
								已然形
								命令形

文		口		用言に	
動詞	詞形容	動詞	詞形容		
				未然形	連用形
				終止形	連体形
				已然形	命令形
				以外に	以外に

(第五表) 口語及び文語助詞接続表

中 等 文 法
文 語

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Apr. 4, 1947)

昭和二十二年四月四日印刷 同日鐫刻印刷
昭和二十二年四月八日発行 同日鐫刻発行
〔昭和二十二年四月八日 文部省検査済〕

著作權所有

著者兼
行作者

文 部 省

鐫
行 者

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 阿部眞之助

印
刷 者

東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

發 行 所

中等學校教科書株式會社

